

ビハール



第17回
ビハール活動
全国集会（オンライン）

記録誌

願われた いのちの物語を紡ごう
～悲しみの中にある人びとに
ぬくもりを届ける～

日 時

2021年
[令和3年]

1 月 30 日 土 **13 時～16 時**

配信会場

聞法会館

主催 浄土真宗本願寺派

主管 第17回ビハール活動全国集会実行委員会

目 次

1. テーマ・開催趣旨	・・・P1
2. 日程	・・・P2
3. 基調講演講義録	・・・P3
4. シンポジウム記録	・・・P24
5. ビハーラ活動の今後に向けて	・・・P40
6. 開催報告書	・・・P41
7. アンケート回答	・・・P42
8. 基調講演レジュメ	・・・P54
9. 実行委員会名簿	・・・P76

テーマ

願われたいのちの物語を紡ごう

～悲しみの中にある人びとにぬくもりを届ける～

開催趣旨

ビハーラ活動とは、本来仏教が実践課題としてきた生老病死の苦悩に応えるため、医療・介護・福祉などの各分野とも連携し始められました。

そして今、その活動は、一人ひとりが自らの生き方・在りようとしてとらえるビハーラ運動に成熟しつつあります。その意味で、ビハーラという生き方は、仏教理念に根ざした自らの実践道としての歩みでもあります。その歩みを一人でも多くの方々に紡いでいきましょう。

第 17 回ビハーラ活動全国集会日程

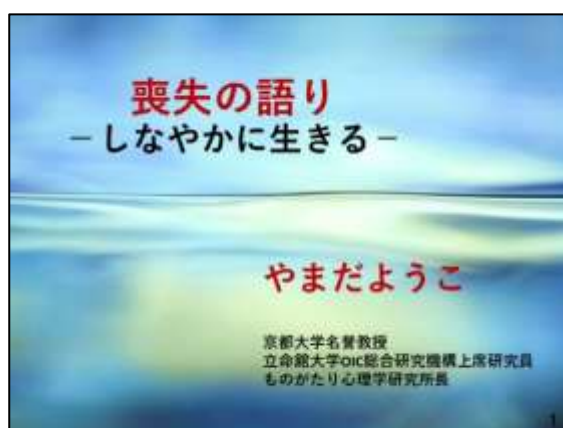
時 間	1月30日(土) 間法会館より配信
13:00	各自YOUTUBEへアクセス
13:15	開 会 式 一、開式の辞 一、勤行(重誓偈) 一、私たちのちかい 一、ご門主様お言葉 一、実行委員長挨拶：竹田空尊(総務・ビハーラ活動推進委員会 委員長) 一、閉式の辞
13:20	休憩
14:20	基 調 講 演 (60分) 講師：やまだ ようこ 師 (京都大学 名誉教授・立命館大学OIC総合研究機構 上席研究員・ ものがたり心理学研究所長) 講題：喪失の語り - しなやかに生きる -
14:30	休憩(10分)
15:30	シンポジウム (60分) パネリスト：やまだ ようこ 師 野 村 康 治 師 (ビハーラ活動推進委員会委員・社会福祉法人至心会理事長) 丘 山 願 海 師 (浄土真宗本願寺派総合研究所長) コーディネーター：伊 東 秀 章 師 (ビハーラ活動推進委員会企画研究専門部会部員・ 龍谷大学講師)
15:35	休憩(5分)
15:45	ビハーラ活動の今後に向けて (10分) 提言者：木 曾 隆 師(実行副委員長・ビハーラ活動推進委員会委員)
16:00	閉 会 式 一、開式の辞 一、実行副委員長挨拶：那須野淨英(ビハーラ活動推進委員会 副委員長) 一、恩徳讃 一、閉式の辞

基調講演 喪失の語り ―しなやかに生きる―



京都大学名誉教授
立命館大学OIC総合研究機構
上席研究員
ものがたり心理学研究所長

やまだようこ 師



皆さま、こんにちは。やまだようこと申します。オンラインの配信ですので、マスクを外させていただきます。今日は、「喪失の語り―しなやかに生きる―」というお話をさせていただきます。

私は岐阜市で育ちまして、西別院の幼稚園に通いました。今も幼いときの「のんのののさま ほとけさま」という歌が思い浮かびます。西別院にとっても親しんで育ちましたので、こういう機会に本願寺で講演させていただくこと、とてもうれしくて光栄に思っております。よろしく願いいたします。

今日は、三つの話をいたします。一つ目は「喪失を生きる―失うことと生きること」。

二つ目は「喪失から生成へ―もの語りの語り直し」。三つ目は「しなやかに生きる―もの語りとレジリエンス」です。

今はコロナ禍なのでよけいそうですが、私たちは病いや災害など、いろいろな種類の喪失、あるいはこんなはずではなかったという自分の想いの喪失も含めて、たくさんの喪失に出会っております。そこで喪失から、どのようにしてしなやかに生成に向かっていくことができるかということをお話しできればと思います。

最初に、少し私の喪失体験をお話します。私は25歳のときに親友を亡くしました。中学、高校、大学、そしてお互いの恋愛など、悩み多き思春期から、25歳まで本当に仲の良かった友達です。



彼女は、結婚しまして、先生をしていたのですが、辞めてご実家の布団屋さんを継ぐことになり、そして初めての赤ちゃんが生まれるという、本当に幸せいっぱいときでした。前の日にも電話がかかってきて、「赤ちゃん、早く出てくるといいわ」とはずんだ声でした。それで翌日電話がかかってきたときは、当然、赤ちゃんが生まれたのだと思っていました。そうしたら、いきなり亡くなりましたという電話でした。本当にびっくりしました。

突然、そんなことを信じられませんでした。分娩台の上で、「あ、目が見えんようになったわ」と言ったのが最後だったみたいです。分娩中に亡くなったので、赤ちゃんも一緒に亡くなってしまいました。彼女のお母さんは、あのとき、もっとこうすればよかったとか、もっと早くお医者さんがこうしてくれればよかったとかという、たくさんの後悔の念と自責の念で、なかなか立ち上がれませんでした。

私も、できるだけ寄り添って、お母さんの話をいつも聞いていました。だいぶたってから、あるときお母さんがこうおっしゃいました。「ようやく、子どもを許せるようになったんよ」と。私は、本当にびっくりして、私は、あの小さな赤ち

ゃんが、女の子だったのですが、小さな棺にいたたまれなくて、この子だけでも生きていてくれたらどんなによかっただろうと思いました。でも、お母さんの気持ちはそうではなかったのです。

確かにいのちは同じだとはいえ、25年間育て上げた娘と、そしてこれから生まれてくるはずのいのちがまったく同じ重みということは、たぶんなかったのではないかと思います。お母さんとしては、いろいろな思いで、赤ちゃんさえ生まれなければとか、いろいろなたくさんの思いを抱えておられたと思います。

そのとき私は、本当に寄り添って、お母さんの気持ちが分かっていたつもりで、自分も同じつもりでいたのですけれども、当事者の気持ちというか、その当時は「当事者」ということばも知らなかったのですが、その当人の気持ちと、はたにいる者とは、こんなにも違うのかということを感じ知らされました。

それから、もう一つですが、それから10年以上もたってからですが、学会で「発達における喪失の意義」というシンポジウムをしたことがあります。その冒頭に、今のような自分の個人的な体験を皆さんの前で話しました。学会で普通は、そういうプライベートなことを話しません。そのとき話をしましたら、会場が一気にしんとなってしまうと、「ああ、しまった、こういう話をするんじゃないかった」と思いました。

しかし、不思議なことに、後になってみて、廊下でとか、駅のホームでとか、いろいろなところで、いろいろな人が私のところへやってきて、そして私の喪失経験についての感想ではなくて、ご自分の喪失経験を語り始めたのです。

そして、内容はみんな違うのですけれども、親が亡くなったときにとか、先生が亡くなってとか。そのとき私は、学会でふつう行われる情報提供と、語りの持っている力の違いを実感しました。語りは語りと呼び、共に生み出していく働きをするのです。そのようなこともございまして、喪失の語りを研究し始めるようになりました。

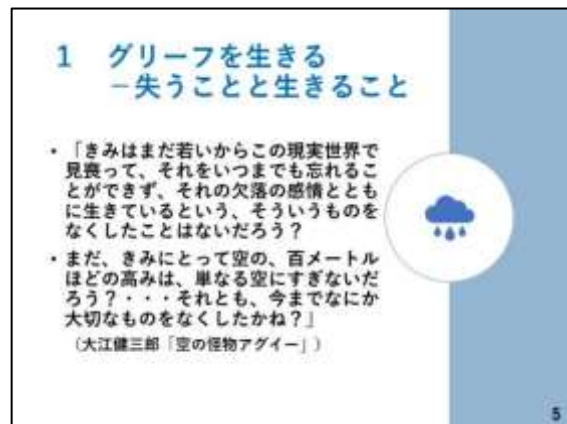


ここで話したいことは、もの語り（ナラティブ）というものは共同生成されていく、そしてもの語りがもの語りを生み出すということです。今、話したように、私のもの語りが呼び水になって、他の人のもの語りを生んでいく、共同生成が行われていきます。「私のもの語り」が、「私たちのもの語り」になっていくといってもよいでしょう。

だから、もの語りは生きものであって、生ものであって、生まれるもの。そして、今ここで生きて伝わっていき、そして新たなものを語りをも生み出していくところに、もの語りというものの持っている素晴らしい知恵があるのではないかと思います。

これは、渦潮の浮世絵です。いろいろ異なる種類の潮流が出会い、ぶつかって、そして狭いところをくぐり抜けるときに渦が起こります。そこに新たな生成が起

こるという意味で、渦潮をもの語りのシンボルに使っております。



一つ目の話です。「グリーフを生きる—失うことと生きること」ということです。ここに引用したのは、大江健三郎さんの『空の怪物アグイー』という短編小説の一節です。大江健三郎さんには、『個人的な体験』という有名な長編小説があります。障害を持ったお子さん、光さんが生まれたときに、この子と共に自分も死んでしまおうとか、いろいろ悩まれました。そして、この子と共に生きていくという決心をするのが、『個人的な体験』という小説です。

これは、その裏バージョンのような小説で、生まれてから「アグイー」としか言わなかったので、『空の怪物アグイー』と名づけられています。

その子は、死んでしまったのですが、アルバイトの学生が、このアグイーの親の芸術家からかけられたことばが、ここに引用したものです。

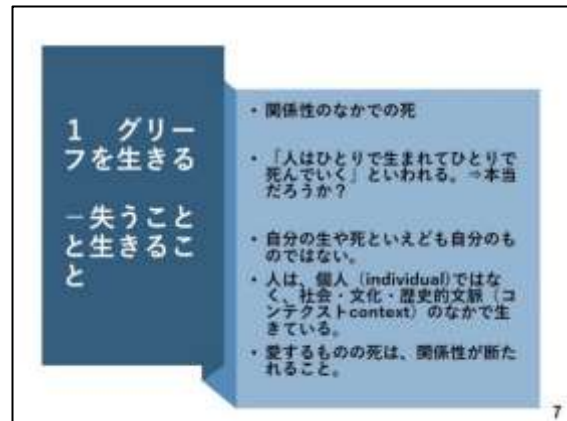
「きみはまだ若いからこの現実世界で見失って、それをいつまでも忘れることができず、その欠落の感情とともに生きているという、そういうものをなくしたことはないだろう？まだ、きみにとって

空の、100メートルほどの高みは、単なる空にすぎないだろう？ ……それとも、今までになにか大切なものをなくしたかね？」。

このとき、このアルバイトの学生は、100メートルほどに真珠色のものが下りてきて、その死んだ子どもと会話を交わすという、その芸術家はどこかおかしいのではないかと思っていました。しかし、やがて彼も成熟し、そして片目を失って、暗闇と明るさ、両方が見えるようになって初めて、あの真珠色のところに、いろいろなくなったものたちが、大事ななくなったものたちが浮かんでいる光景が見えるようになったという。そういうお話です。



これは、村上春樹さんの『ノルウェーの森』の一節です。「なあキズキ、お前は昔俺の一部を死者の世界にひきずりこんでいった。そして今、直子が俺の一部を死者の世界にひきずりこんでいった。ときどき俺は自分が博物館の管理人になったような気がするよ。誰一人訪れるものもないがらんとした博物館でね、俺は俺自身のためにそこの管理をしているんだ」。村上春樹さんも、常に喪失をテーマに小説を書いてこられた方ですが、こういった死者と共に生きるお話をしたいと思います。



「グリーフを生きる一失うことと生きること」で、関係性の中での死ということ。人は一人で生まれて、一人で死んでいくと言われますが、本当でしょうか。とんでもないです。一人で生まれることもできないし、そして、たとえ一人で死んだ、孤独死したとしても、その最後の世話をしてくれる人がどなたか必要です。

自分の生や死といえども自分のものではありません。ですから、個人ではありません。個人 (Individual) という概念は、分割して、分割して、これ以上分割できないものという意味ですけれども。実は、私たちは個人で生きている、分割されたものとして生きているのではなくて、社会や文化や、歴史的な脈、コンテクスト (context)、織物の中で生きているのです。

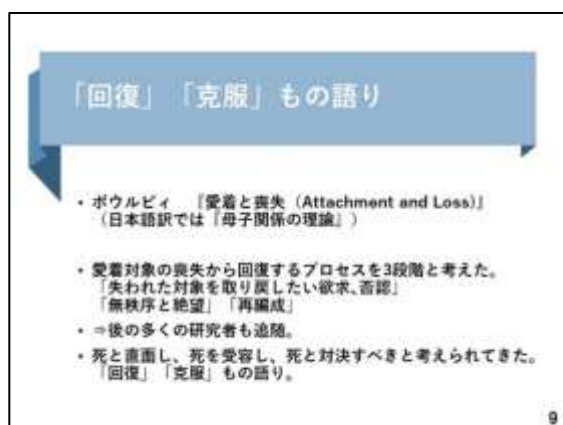
これは仏教の世界を考えておられる皆さまにとっては、当たり前のことかもしれません。愛するものの死は、関係性が断たれることと考えることができます。そういう面で見ますと、西欧文化のなかで考えられてきた死別や、悲嘆や、悲哀の考え方は、私たちが実感しているものと違う部分があるのではないかと私は思ってきました。



従来の考え方は精神分析学が基になっています。死別 (bereavement)、悲嘆 (grief)、悲哀 (mourning) と訳されていますが、フロイトは『悲哀とメランコリー』という本の中で、喪の作業 (mourning work)、モーニングワークということばを提案しました。

これは、死によって取りつかれた悲嘆という強い負の感情、それによって自我が抑圧されている状態から、死と対決し、自我を死から切り離し、心的外傷を回復する作業というふうに言われています。

その後、多くの研究者が追随しまして、そしていろいろ段階説などができましたけれども、基本的には死と対決して、死を切り離して、そして立ち直っていくことが大切と考えられてきました。

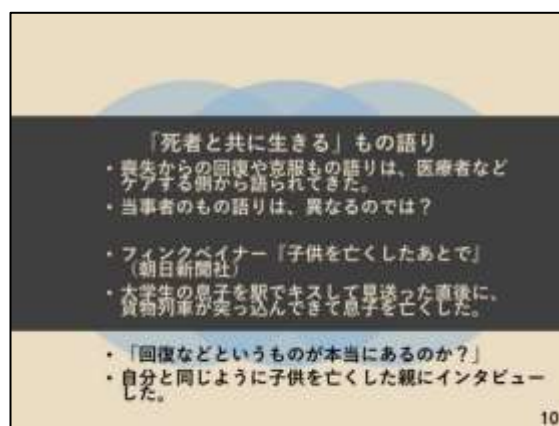


これは、回復や克服もの語りと言っていい。フロイトの考えを受け継いだボウ

ルビィは『愛着と喪失』(Attachment and Loss) という本を書きました。日本語訳では、『母子関係の理論』と訳されていますが、母子関係だけではなくて喪失というものを正面から扱った大切な本です。

ボウルビィは、愛着対象の喪失から回復するプロセスを3段階として考えました。失われた対象を取り戻したい欲求や否認から、無秩序と絶望、再編成という型です。

その後、7段階になったり、5段階になったり、いろいろたくさん説がありますが、いずれも基本は同じで、死を受容して、正面から対決すべきだというふうと考えられてきました。それは、克服もの語りと言えるかもしれません。「回復」「克服」もの語りです。



それに対して、私は、大江健三郎さんの小説の芸術家や、あるいは村上春樹さんのキズキの話のように、「死者と共に生きるもの語り」が大切ではないかと思っています。

喪失から回復したり、あるいは克服していくというもの語りは、どちらかというと医療者やケアする側から語られてきました。一番初めに私の体験をお話したように、喪失体験の当事者、当人のもの語りは異なるのではないだろうかということです。

フィンクベイナーという方が『子供を亡くしたあとで』という本を書いています。彼女は、大学生の息子さんとキスをして、いつものように「いってらっしゃい」と送った直後に、貨物列車が突っ込んできて、息子さんが亡くなりました。本当に突然、子どもさんを亡くしたということです。

彼女は、今までの喪失の研究をいろいろ調べ、どうもちがう、「回復などというものは本当にあるのだろうか？」と疑問を持ちました。



そして、自分と同じように子どもを亡くした親にインタビューをいたしました。

そうしますと、多くの人がこのようなことを語りました。「痛みと心にあいた穴は消えませんが、それは二度と埋まることのない空洞です。人生がうまくいっているとしても」「娘が死んですぐのころは、心が死に絶えた感じがしたものです。今ではそんな感じはしないけど、自分の何かが永遠になくなってしまったのは確か。心に十字架を負わされたともいえるわ。重石をつけられたんだって、ずっしりと重い重石をね。それは心の奥底に沈む悲しみなのよ。」

従来は、このような空洞や深い悲しみを抱えることはよくないので、それをな

くして回復していくという方向だけが強調されてきました。しかし、「深い悲しみと共に私たちは生きていく」というものの語りもあるのではないかと思います。



ここで、もの語りとは何かということをお話しておきます。ナラティブ (narrative) をもの語りとして訳しています。ナラティブとは、経験を編集していく作業のことです。広い意味のことばで、経験を組織化して、意味づける行為。あるいは二つ以上の出来事をむすぶ行為というふうに定義しています。

ナラティブの訳は難しくて、専門家は片仮名語のままが普通ですが、どうしても、片仮名語だと記号のように、本当に身近に自分の実感として感じるのが難しくなります。

ただ、日本語の「物語」は、やはり少し狭い意味なんですね。もっと広い意味で、語る行為も含んでいるので、私は「もの語り」と訳すことにしました。英語のナラティブは、日本語の「物語」よりも広い意味ですが逆に、日本語の「もの」というのは、英語にはない広がりがあります。物質の「物」、オブジェクトとしての「物」だけではなくて、若者など人のことも「もの」と言います、あるいは、霊魂も「もの」と言います。もののけと

か、もののあはれなど、本当に含蓄の深いことばです。それで、「物」ではなくて、平仮名の「もの」と書いています。ナラティヴ（もの語り）には、先ほど言いましたように、当事者の経験が大事です。さらに、正しいもの語りは、一つではなくて、立場や見方によって異なっているという多様である。多様性に関われているということが、もの語りの持つ大きな利点になります。



私たちには、『浦島太郎』のもの語りもあれば、『かぐや姫』や『桃太郎』のもの語りもあり、たくさんのもので語りを持っています。そして、どれが正しいもの語りかという問い方をしません。もの語りは多様であるわけです。もの語り、ナラティヴは一つではない、多様なもの語りがあるということがとても重要なことです。

私たちは、これが正しい歴史だというふうに思っているものも、ある種のマスター・ナラティヴ（支配的なもの語り）かもしれません。それに対して、もう一つのもの語り、多様なもの語りがあるということは、オルタナティヴ・ナラティヴ、別のもの語りもあるのではないかとこの視点を開きます。たとえば、男性中心で語られてきたもの語りに対して、女

性の側から見た違うもの語りがあるのではないか。あるいは強者のもの語りに対して、弱者のもの語りを語っていくというように、多様な語りを生み出していくことができます。

立場によって、もの語りは異なるということになりますと、異なる文化の人たちが、それぞれ違うもの語りを持っても良いのではないかとということになりますし、医療の領域では、医療者のもの語り、診断や疾患（disease）のもの語りに対して、患者さんの立場からの語りを、病いの語り（illnesses narrative）と呼んでいます。



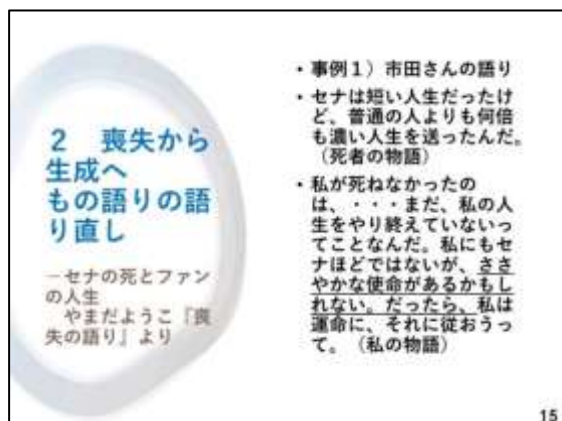
どちらが正しいかということではなくて、医療者と患者では「もの語り」に違いがあるということです。これは、1型糖尿病の患者さんが書いた、ビジュアル・ナラティヴの例です。彼女は、糖尿病と診断されて、糖尿病部屋に閉じ込められてしまったような感じがしました。「カロリー制限しなさい」「運動しなさい」「インスリン注射しなさい」「食事もしっかりと制限して」と、糖尿病は治るわけではありませぬので、一生この糖尿病部屋の中で暮らさないといけないのかという感じだったということでした。とてもよく、その実感が出ています。

お医者さんや看護師さんは、良い方々ですが、糖尿病部屋と一緒に入るわけではないので、外側から、「うん、よくできましたね」「また、2週間頑張りましょうね」みたいにみているだけです。

糖尿病と診断されたら、すべてが糖尿病患者として一生を生きなければいけないのか。人生というのは、もっと大きくて、その中の一部に糖尿病があるにすぎないのではないか？彼女は、そのような問題提起を示してくれているのではないかと思います。

以上のように、その当事者の立場になると、多様なナラティブがあります。この場合は、医療者のものの語りが正しいのか、患者さんのものの語りが正しいのかではなくて、それぞれ違うものの語りを持っている可能性がある。お互いにそれを理解し尊重することが大事なのではないかという視点を提起しました。

それから、喪失というものに対する見方も、喪失を克服するとか、回復するというものの語りだけではなくて、喪失と共に、共に生きていくものの語りがあるのではないかということをお話しました。



二つ目のお話に入りたいと思います。

「喪失から生成へ—ものの語りの語り直し」です。語り直し、リテリングということ、ものの語理論ではとても大事にしてい

ます。ものの語りは一つではないので、別のものの語りに語り直していくことができます。

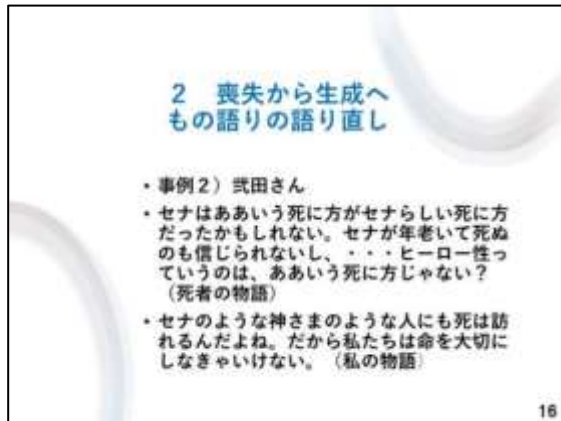
これは、私の『喪失の語り』という本の「セナの死とファンの人生」という章からの引用です。今ではご存じの方は少なくなったかもしれませんが、アイルトン・セナというレーサーが亡くなった、その死をファンの人たちが語ったものです。レーサーでなくても、今もロック歌手であるとか、いろいろな方の死で同様のことがおこります。ファンに対して、「あなたは恋人ではないでしょう？」というのは外側からの見方で、当事者にとっては、本当に恋人以上の存在であったりするわけです。

その、セナが亡くなったときに、自分も自殺したいと思うぐらいのファンの人たちの語りです。最初の事例1は、市田さんの語りです。市田さんというのは仮名なのですが、私はどうしても、これをAさん、Bさんなど記号で呼びたくありません。あるいは1番さん、2番さんと番号でも呼びたくない匿名でも人間の名前をつけたいわけです。しかし、たくさんの方の名前になりますと、どれがどの人だったか分からなくなることがあります。それでやむなく、市田さん、武田さん、三田さん、四田さんのように、順番にしても分かるように、市田さんと名づけています。

市田さんは、「セナは短い人生だったけど普通の人よりも何倍も濃い人生を送ったんだ」と語りました。この人は自殺しようかと思ったほど悲嘆に沈んだ方なのですが、死者のものの語りに対して、「私が死ねなかったのは...まだ、私の人生をやり終えていない」という、私のものの語り

をつけ加えて語るようになりました。

このように、語りの内容は違うけれども多くの人に共通性があるということが分かってきました。死者はこうだったのだというものの語り、それに対して私はというような語りです。

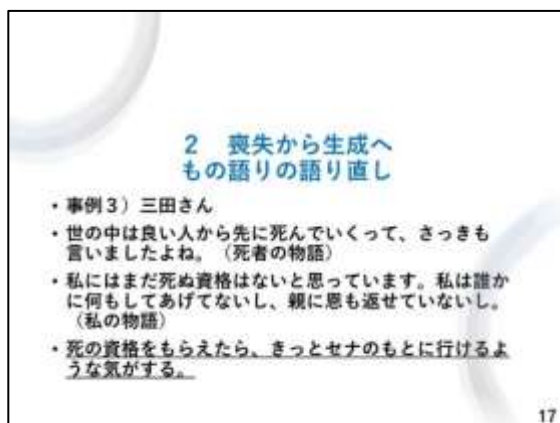


2 喪失から生成へ
もの語りの語り直し

- ・事例2) 武田さん
- ・セナはああいう死に方がセナらしい死に方だったかもしれない。セナが年老いて死ぬのも信じられないし、・・・ヒーロー性っていうのは、ああいう死に方じゃない？ (死者の物語)
- ・セナのような神さまのような人にも死は訪れるんだよね。だから私たちは命を大切にしないといけない。(私の物語)

16

これは、武田さんの語りです。「セナは、ああいう死に方がセナらしい死に方だったかもしれない。セナが年老いて死ぬのも信じられないし、・・・ヒーロー性っていうのは、ああいう死に方じゃない？」というのがセナのものの語りです。そして自分のものの語りが語られました。



2 喪失から生成へ
もの語りの語り直し

- ・事例3) 三田さん
- ・世の中は良い人から先に死んでいくって、さっきも言いましたよね。(死者の物語)
- ・私にはまだ死ぬ資格はないと思っています。私は誰かに何もしてあげてないし、親に恩も返せてないし。(私の物語)
- ・死の資格をもらえたら、きっとセナのもとに行けるような気がする。

17

三田さんは「世の中はよい人から先に死んでいく」というものの語りをつくりました。そして、「まだ死ぬ資格がない」という私のものの語りがつづきます。みんなものの語りの内容は違うのですが、構造は似ています。



2 喪失から生成へ
もの語りの語り直し

- ・事例4) 四田さん
- ・『王者ゆえの孤独』みたいな・・・、セナは淋しかったのかな？セナは多くのファンに見送られたかったのかな？引退して人知れず亡くなるのはイヤだって (死者の物語)
- ・セナが80で引退したとして、日本の新聞にのると思う？のらないよね。そう思うと、こうやって自分が見送れてよかった。(私の物語)

18

四田さんは『王者ゆえの孤独』みたいな・・・、セナは淋しかったのかな？ セナは多くのファンに送られたかったのかな？ 引退して人知れず亡くなるのはイヤだって」という死者のものの語りをつくって、自分がセナを見送ることができた。「セナが80で引退したとして、日本の新聞にのると思う？ のらないよね。そう思うと、こうやって自分が見送れてよかった」。ファンの中の一人としての私のものの語りを語りました。



2 喪失から生成へ
もの語りの語り直し

- ・1) 死者のものの語り×私のものの語り「むすび」の生成機能
- ・2) 仮定法化された現実の構成もし・・・(かもしれない)、だったら・・・
- ・3) 時間軸の過去から未来への転換
- ・4) イマジネーション (想像力) 非日常世界の役割
- ・5) 文化×繋がる×私のものの語り「死者が見守る」「死者と共に生きる」「死者のおかげ」「受け継ぐ」

19

このように研究をしていきますと、一見、全然違う話をしているみたいですが、死者のものの語りに、私のものの語りがむすばれていくことがわかります。この「むすび」ということばは、生まれることも意味します。「むすびの神」とか、「こけむす」とか、やまとことばではとても重要な意味を持つことばです。「むすび」は、

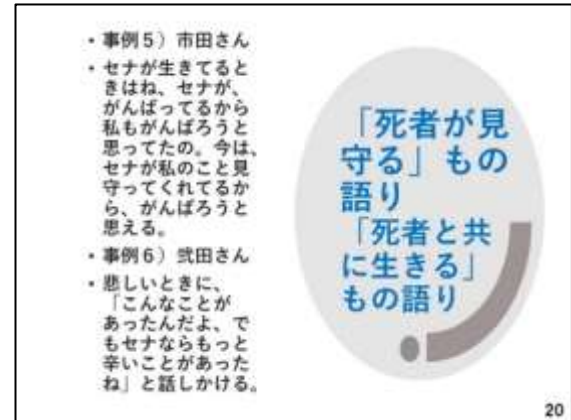
生成していく機能を持っています。異なるところにあったものをむすぶことによって、生成していく働きがあるといえましょう。

「むすぶ」ということばは、「つなぐ」とは少し違います。「つなぐ」は、意図的な行為で、「牢獄につながれる」など、受け身にも使います。それに対して「むすび」は、自動詞的で相互主体的です。「男女がむすばれる」とは言いますが、「男女がつながれる」とはいいません。「紅白のむすび」を「紅白のつなぎ」と言い換えることはできません。「むすび」は、生成機能をもつすてきな日本語です。

後でまたお話ししますが、仮定法を使うことも重要です。「もし」「かもしれない」というような、仮定法で新しい現実をつくっていく行為です。

仮定法は未来に向かうことが大切で、時間軸が過去に向かうと、「あのとき、ああすればよかった」という悔やみの語りになります。

それから、イマジネーション、想像力の役割が大きいですね。想像力によって、「非日常世界」が入ってきます。信心深い人でなくても、死に直面すると、仏さま、神さまなど、聖なるものの語りが生まれてきます。私たちは「死者に見守られる」「死者のおかげ」「死者の志を受け継ぐ」など、たくさんものの語りを持っています。それらは、自分自身が一人で生み出したもの語りというよりは、文化で受け継がれてきたもの語りを、語り直しているというふうに見ることができます。私たちは文化のなかでストックされてきた多くのもの語りを、自分なりのバージョンで語り直しながら生きているといってもよいと思います。



次に「死者が見守るもの語り」と、「死者と共に生きるもの語り」です。市田さんは、「セナが活着しているときはね、セナが、がんばっているから私もがんばろうと思っていたの。今は、セナが私のこと見守ってくれてるから、がんばろうと思える」と語りました。

この人たちには、ここでは省略していますが、みんなセナと生きてきた人生のもの語りがあります。たとえば、鈴鹿サーキットに通うのに、ほかの人から、「そんなところに通うなんて」「そんなの不良少女じゃないか」と言われても、セナに会いにいきました。「一人で初めて電車に乗れた」とか、あるいは、「セナのおかげで真面目になった」とか。みんな、セナと一緒に生きてきたもの語りというものがあわけです。

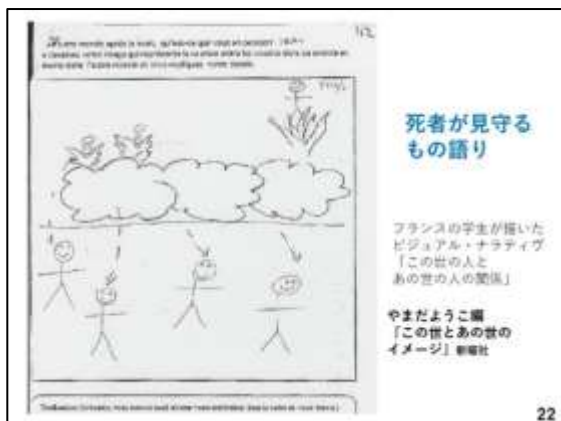
武田さんは「悲しいときに、『こんなことがあったんだよ、でもセナならもっとつらいことがあったね』と話しかける」。だから、亡くなったらおしまいではなくて、亡くなった人と話し、語りかけながら生きていると語りました。



死者が見守るもの語りも重要です。日本では、仏教の経典そのものではないかもしれないけれども、死者が仏さまになるというものの語りを、文化のものの語りとして持っています。だから、死者が仏さまになって見守ってくれるというものの語りにととてもなじんでいます。

次の絵は、別の研究『この世とあの世のイメージ』で、日本の学生が描いたものです。ビジュアル・ナラティヴと呼んでいますが、イメージ画で語ってもらう研究です。この点線でお隣に居るのは、友達とかだったらこの辺にいそうということです。そして、おじいちゃんとか、おばあちゃんとかだったら、曇の上から見守ってくれるという、このような典型的な絵の一つです。

死んだら仏さまになる、死者が見守ってくれるという話は、非常に日本的かと思いきや、海外で同じような絵を描いてもらっても、非常にたくさん出てきます。



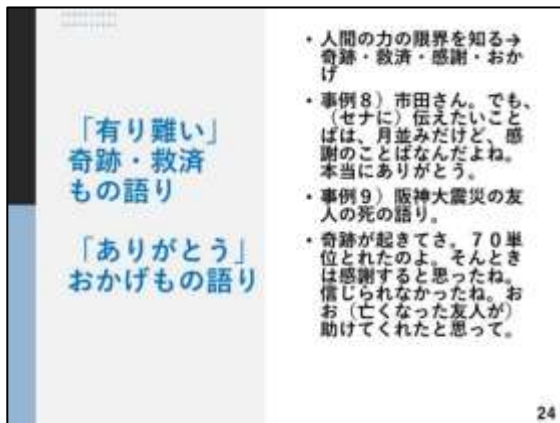
これは、フランスの学生が描いた、同じような絵なんですけれども。この世の人とあの世の人の関係をイメージして絵に描いてくださいというふうに描いてもらおうと、やっぱり曇の上から眺めているという絵を描いてくれます。この人は、教会にも通っているカトリック教徒です。カトリックの教義の中にも、死者が見守るというものはないと思いますが、天使のような少し細かいところは違うのですが、やはり曇の上から見ていてくれる。



これは、イギリスの絵です。イギリス国教会の信者なので、プロテスタントの一派ですけれども、イギリスの学生が描いたビジュアル・ナラティヴでも、曇の一番上に God という神さまがいるなど、細かいところは多少違いがあるのですが、やっぱり曇の上から、死んだ人が私たちを眺めていてくれる絵が描かれます。このような「死者が見守ってくれる」というものの語りは、かなり普遍的に文化を超えて見られるものではないかと思っています。



動画配信画面



それから「有り難い」「奇跡や救済」あるいは、「おかげ」のものの語りが重要です。どうして、死と喪失と向き合う、あるいは喪失を経験すると、「有り難い」という感謝の気持ちになるのでしょうか。人間の力の限界を知るからではないかと思われまふ。そこで奇跡とか救済ものの語りとか、感謝やおかげものの語りが出てきます。

インタビューしました方々に、「最後にセナに伝えたいことばはありますか」と聞くと、みんな「ありがとうと言いたい」と答えました。この例は市田さんですが、「でも、セナに伝えたいことばは、月並みだけど、感謝のことばなんだよね。本当にありがとう」

この「ありがとう」は、何といいことばでしょう。「有ることが難しい」、今、ここにあることが当たり前ではなくて、あるいは当たり前だと思っていたことが、とても難しいことなのだ。だから、今、ここにいるだけで、ありがたいということですよ。

今、新型コロナの時代なので、とりわけ私たちもそういうふうに感じます。今まで普通にやっていたことが、何と特別なことだったのだろうというようなことになりますし、あるいは震災の後なども、本当に日常生活が送れるだけでもありがたいという気持ちになったと思います。

事例9は、阪神・淡路大震災で友人を亡くした方の語りです。「奇跡が起きてさ。70単位とれたのよ。そのときは感謝すると思ったね。信じられなかったね。お(亡くなった友人が)助けてくれたと思って」。

この人は、自分が勉強をしたから単位が取れた、それで卒業できたというふうに、自力で達成したとは、語りませんでした。「亡くなった人が助けてくれたから、そのおかげで単位が取れた」。この転換がすごく大事だと思います。自分の力で頑張った、自分は勉強したからというのではなくて、奇跡が起きたというふうに考えるわけです。

死に直面すると自分の力の限界を知り、奇跡によって救われた、だからありがたい。死んだ人が守ってくれた、そのおかげなんだというものの語りになっていくのでしょうか。この転換の仕方も、私たちにとってもなじみのあるもので、とても大切なものの語り方ではないかと思っています。



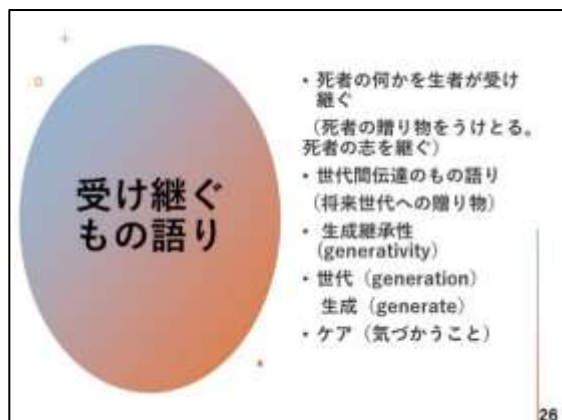
それから、喪失が奉仕につながっていくものの語りがあります。これは、中原中也さんの『春日狂想』という長い詩の一節です。「愛するものは、死んだのですから、たしかにそれは、死んだのですから、もはやどうにも、ならぬのですから、そのものために、そのものために、奉

仕の気持ちに、ならなけあならい。奉仕の気持ちに、ならなけあならない」という詩です。論理的に考えると、愛するものが死んだから、奉仕の気持ちになるというのは論理の飛躍があるみたいに思いますけれども、私たちの気持ちの上では、本当にすんなりとおちてくる詩です。

中原中也という方も、たくさんの死をくぐり抜けた方です。子ども時代はお兄さんが亡くなりました。悲しむ母親を見ていて、出来のいい子の方が死んじゃった。出来の悪い僕の方が生きのびちゃったという、そういう後ろめたさを持って育ちます。

「春日狂想」は自分の子どもが亡くなったときの詩ですが、自分の子どもを早く亡くし、本当に悲痛な叫びの中からできた詩ですが、「愛するものは、死んだのですから、たしかにそれは、死んだのですから、もやはどうにもならぬのですから、奉仕の気持ちに、ならなけあならない」。これは、とても大事な語りの転換の仕方ではないかと思います。

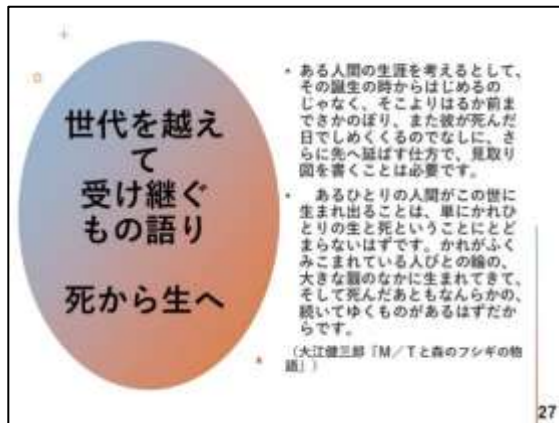
せめて何か社会にできることがないだろうかということ。あるいは何か自分にも使命があるんじゃないだろうか。使命感は、「受け継ぐもの語り」にむすびつきます。死者の何かを生者が受け継ぐ、あるいは死者の贈り物を受け継ぐ、あるいは死者の志を受け継ぐもの語りです。



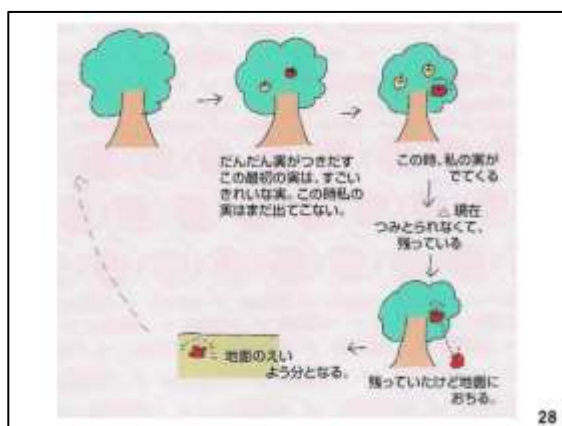
アメリカに留学していた高校生が、ハロウィーンで玄関を訪れ、「フリーズ」と言われて、そのフリーズの意味が分からなくて、動いた途端に射殺されたという不幸な出来事がありました。その後、そのご両親は、長期にわたってアメリカで銃の規制運動に携わっておられます。このような「この子のいのちを無駄にしない」「志を受け継いでいく」「死者の贈り物を受け取る」などのもの語りは、いろいろなところで見ることができます。

もう一つ、「世代を超えて伝達していくもの語り」があります。今だけのことだったら、べつに享樂的に生きても、楽しめればいいじゃないかということになります。しかし、それが将来世代にマイナスの何かを贈ってしまってはならないと考えると、別です。今、起こっているいろいろな問題、環境破壊の問題、温暖化の問題など、将来世代にどのようなものを私たちは贈り物として贈ったらいいのだろうかという考え方になります。

それを、エリクソンはジェネラティビティ (generativity)、生成継承性と呼びました。生成、ジェネレート (generate) ということばとジェネレーション (generation) ということばを掛け合わせた造語です。次の世代、あるいは次の次の世代をケアしていくこと、それを生成継承性と呼びます。世代という単位で、次の世代、あるいは次の次の世代、まだ生まれてこない将来世代までも含めて、私たちは長い時間スパンでケアしていくことができるかどうか、それが、死者のもの語りを受け継ぐもの語りに関連してくるかと思います。



再び、大江健三郎さんの小説ですが、『M／Tと森のフシギの物語』、世代を超えて受け継ぐもの語りです。「ある人間の生涯を考えると、その誕生の時から始めるのじゃなく、そこよりはるか前までさかのぼり、また彼が死んだ日でもしめくるのでなしに、さらに先へ延ばす仕方、見取り図を書くことは必要です」。「あるひとりの人間がこの世に生まれ出るとは、単にかれひとりの生と死ということにとどまらないはず。かれがふくみこまれている人びとの輪の、大きな翳のなかに生まれてきて、そして死んだあともなんらかの、続いてゆくものがあるはずだからです」。



次の絵は、今の大江健三郎さんのことばを描いたような絵です。もちろんそうではなく、「あなたの人生をイメージして絵にしてください」という問いかけで描

いてもらった絵の一つです。「あなたの人生」と問うているので、ふつうは個人の人生、生まれてから死ぬまで絵に描くのが大多数なのですが、この絵はちがっています。

この絵を描いたのは女子学生ですが、自分が生まれる前、生まれる前の生態系から始めています。そして、自分が生まれる前にも、実があって、「この最初の実」はすごいきれいな実。このとき私の実は、まだ出てこない」と説明しています。エリクソンが言う、まさにジェネラティヴィティ、自分が生まれる前にも世代があって、その中に自分が生まれてくるというわけです。そして、「私の実」が出てくる。そして現在は、摘み取られなくて残っている。そして、残っていたけれども地面に落ちる。

この人生だけ見ると、生まれてきてから、落下していく、落ちていく人生みたいです。上昇していく人生、どんどん上っていく人生は、よく描かれます。階段上りであるとか、山登りであるとか、登っていく人生。それに対して、この人の人生は、落ちていくみたいに見えます。

しかし、落ちていくだけでなく、地面に落ちた後、そのまま子孫を残すというのではないのですけれども、地面の栄養分になって、そして穏やかだけれども次の世代の循環にむすびついていくのです。だから、生まれる前にも前の人たちがいて、そしてそのおかげで私が生まれてきて、そして死んだ後にも続いていくものがあるという、そういう絵になっています。そして、死んでも何か贈り物をして死んでいくということです。

この絵を、アメリカのライフストーリーの研究者たちのところへ持って行って、

説明しましたら、みんなとても興味を持ってくれました。そして、「現在の絵、摘み取られなくて残っている」とは、いったい何だと質問されました。私もそのときは、うまく説明できませんでした。これは、女子大生にしては、ちょっと寂しいなと思ったわけです。立派な赤いリンゴになって、おいしいリンゴになりましたみたいな絵がないのですから。しかし、考えてみたら、これは人間の立場ではなくて、リンゴの立場、徹頭徹尾リンゴの人生を描いているのだということに気がつきました。

人間の立場から見ると、真っ赤なおいしいリンゴになりました、というのが、リンゴの人生の成功、成功ものの語りになります。でも、リンゴの立場から見ると、人間に食べられることが必ずしもいいことではない。むしろ摘み取られてなくて残っているのは、「おお、やった」ということです。なぜなら、地面に落ちて地面の栄養分になって、次の世代にむすびついていくからです。

そう考えると、人間の立場から見た幸せと、リンゴの立場から見た幸せは違うということになります。リンゴの立場に立って見たら、興味深い絵だと思えます。



次は3番目の「しなやかな復活力ーものの語りとレジリエンス」というお話です。

レジリエンスということばは、しなやかな復活力と取りあえず訳しております。

最初の例ですが、ある運送会社さんが死亡事故を起こした。お葬式に駆けつけていって、「すみません」と謝ったら、責められるわけではなくて、「この方には子どもさんがいた。そのことだけは覚えておいてください」と言われたので、余計にずきんと来て反省させられたということです。

その運送会社の社長さんは、「会社を大きくしよう」とがんばって働いてきたけれども、「利益よりも、もっと安全運転の運送会社にしよう」というようにものの語りを変えました。この不幸な事故を契機にものの語りを変えていったということです。

でも、安全運転の運送会社にするにはどうしたらいいかわかりません。そのとき、運転手さんたちが、お子さんがつくった作品とか、ぬいぐるみとか、そういったものを運転席に置いているのを見て、「これだ」と思ったそうです。そして、安全を祈ってトラックに子どもの絵を描きました。そうすると、絵を媒介にして非常に注目されるようになって。駐車場では「これは何の絵だ」と聞かれるようになり、会話が弾むようになった。運転手さんたちも、自分たちはとてもいいことをやっているんだというふうに思えて仕事に誇りと喜びが生まれた。それを、また家へ帰って、「今日、こんなことがあったよ」というふうに家で語るようになった。そういうふうに運転手さんが変わった。塗装屋さんも、初めは「なんでこんな面倒な子どもの絵なんかを描くんだ」と言っていたのが、「次はどんな絵が来るんだ」と、とても楽しみにしてくれるよ

うになった。協力してくれる人も増えて、そして仕事も増えていったということです。

最近では、これは全国展開していて、全国で共鳴した人たちが同じような運動をしたり、あるいは世界に広がっているということですが、これが、広告を描いて、あるいは標語で、「安全運転しましょう」とうスローガンではなくて、子どもさんの絵を描いたというところがとてもよかったのではないかと思います。

こういうふうにしてマイナスをプラスに発想を転換していくことがレジリエンス、しなやかな復活力の一つの例ではないかと思います。

3 負を転換する語りーレジリエンス（しなやかな復活力）

- ・人生において、取り返しがつかないマイナスの出来事（病気、事故、災害、失業、死、喪失など）は、多かれ少なかれ誰にも起こる。その出来事を変えることはできないが、ものの語りは変えられる。
- ・→不幸な経験をプラスに変えて生きる力にする。レジリエンス（回復力、復活力、弾力性、しなやかさ）
- ・私たちは、文化のなかに多様なものの語りの宝庫をもっている。適時、引き出しから出せる。
- ・→七転び八起き。難難汝を玉にする。（ことわざ）
- ・→塞翁が馬（故事）。無用の用（荘子）
- ・→明けない夜はない。冬のあとに春が来る。（教訓）
- ・→上を向いて歩こう。あと一歩前に進もう。（歌）

30

レジリエンスということばですが、これも訳が難しいのでカタカナのままで使われることが多いのですが、日本語にしないと心の奥に響きません。もともとはバネなど、弾力ではね返すというような意味です。ただ、日本語には「柳に風」のような「しなやか」というとてもすてきなことばがありますので、しなやかな復活力と訳しています。

人生において、取り返しがつかないマイナスの出来事は、病気、事故、災害、失業、死など、たくさんありますが、そういったものは、多かれ少なかれ誰にも起こります。その出来事をなかったこと

にするわけにはいかないのですが、ものの語りを変えることはできます。

不幸な経験をプラスに変えて、生きる力にしていくことをレジリエンスといいます。私たちはすでに文化の中に、このようなレジリエンスの多様なものの語りの宝庫を持っていて、適時に引き出しから出すことができます。「七転び八起き」「難難汝を玉にする」となどことわざもありますし、「塞翁が馬」とか、「無用の用」など古典のことばもあります。

「無用の用」は、私がとても好きな荘子のことばです。あるとき、夏の暑い日、大きな木がありました。そこに旅人が木陰に休みに来ました。そして木に語りかけます。「君は、どうやってこんなに大きな大木になったんだい」と聞きました。そうすると、木が答えるには「私は何の役にも立たなかったから、こんなに大きくなれたんですよ。私の周りにいた、すくすく育った木たちは、みんな建材として建築のために切り出されていきました。私は曲がりくねっていて、何の役に立たなかったの、こんなに大きくなって、そして皆さんに木陰を提供できるまでになりました」と木が答えたというわけです。

役に立たない、無用であったからこそ用があるという考え方で、荘子は障害を持っていたからこそ戦争に取られなくて生きのびることができたとか。そういった無用の用の例話をたくさん出しています。発想を転換するときに役立つ、すばらしいことばだなと思います。

「明けない夜はない」とか、「冬のあとには春が来る」とか、教訓もあります。今もコロナ禍の時代にいろいろ語られて

います。「上を向いて歩こう」とか、「あと一步前に進もう」とか、歌もたくさんあります。



私たちの伝統の中には、そういったしなやかな復活力の知恵がたくさんあります。たとえば、「流れ橋」もそのひとつです。東日本大震災の後に、どんな水の圧力にも耐えられる頑丈な構造をつくる復興が計画されました。想定外のことが起こったので、もっと大きな想定をして、どんなことが起こっても耐えられる構造をつくろうとすれば海がまったく見えなくなり景観を失う岩壁をつくることになります。それに対して「流れ橋」は、壊れても作り直せるしなやかな構造です。流れることも想定して、しなやかに復活できる。こういった知恵がすでに私たちの伝統の中にあるわけです。

壊れないようにするのか、壊れてもしなやかに柔軟につくり直せば良いのか。壊れても変化してもいい、こういう語り直しの知恵があるんじゃないかと思います。

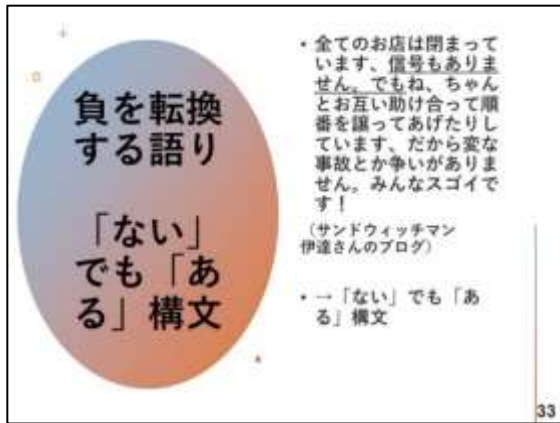


当日の講義の様子



東日本大震災の後には、いろいろなことが起こりました。これはイギリスの新聞『インデペンデント (The Independent)』紙が、日曜版に「がんばれ、日本。がんばれ、東北。」というメッセージを出してくれた紙面です。あの誇り高いイギリスの新聞が日本語で書いてくれた珍しい記事です。

これが世界中に広まって、「がんばれ、日本」というのが日本中、世界中でもこのエールが共鳴して飛び交ったわけです。その元になったのは、お笑い芸人の方のブログなんですね。この、『インデペンデント』紙の編集長のマリンさんは、そのブログに興味を持って英訳させました。そして、とても共感しました。編集部では、大激論したそうです。震災の悲惨さを伝える津波の写真を載せるか、あるいは勇気づけるメッセージ、つまりナラティブ、もの語りを伝えるか、どちらが大事かという激論をしました。結局「がんばれ、日本。がんばれ、東北。」という、そういったメッセージを伝えることにしたそうです。



彼を感心させた、サンドウィッチマンの伊達さんのブログには、「全てのお店は閉まっています、信号もありません。でもね、ちゃんとお互い助け合って順番を譲ってあげたりしています」と書かれていました。この文章がすごいのは、ないものに目を向ければ、ないものはたくさんあるのですけれども、「でも」と逆転して、あるものを語っているところです。

信号どころか、多くの方が亡くなり、甚大な喪失がありました。新聞記事には「夫が亡くなりました、でも遺体が見つかってお葬式ができただけでもよかった」、そういう語りもありました。「ない」ほうに目を向けると、「これがない、これが欲しい、あれもない、あれも欲しい」という語りになりがちです。しかし、「ない」でも「ある」というふうに変換していく構文をつくると、レジリエントの語り構文になります。



それから、仮定法の構文もレジリエントに役立ちます。これは、先ほども例に出しました無田さんの語りですが、この方も本当に自殺しようかと思ったぐらいでした。そして、交通事故を起こしました。普通の因果関係で言えば、セナのことを考えてポーとしていたから、セナのせいで交通事故を起こしたというものの語りにしてもいいわけですが。彼女は仮定法を使い、「本当なら、けっこう凄いやがしててもおかしくない状況だったんだ」と語りました。もっとひどかったかもしれないのに、この程度で済んだのはセナのおかげだ。セナが助けてくれたのだというものの語りにします。こういうことは、私たちが普段やりますよね。イメージの力で、「もっとひどかったかもしれない」という仮定法をつくって、まあ、この程度で済んでよかったというような話にします。



さらに「もの語りとしなやかな復活力」をつづけます。私たちは自分で自分に繰り返し語り掛けているもの語りがあると思います。自分を励ますもの語りです。これは、『だいじょうぶ だいじょうぶ』という絵本の一頁ですが、初めから終わりまで「だいじょうぶ」しか言わないおじいちゃんがでてきます。僕がいじめられて帰ってくるたびに、おじいちゃんが

「だいじょうぶ だいじょうぶ」と言ってくれるのです。

あまり根拠のない「だいじょうぶ」なんですけれども、でもそれを唱えていると元気になります。私たちは子どものころ「痛いの、痛いの、飛んでけ」とおまじないをかけてもらったことがあります。あれも、レジリエンスのものの語りだったのです。心理療法の中に、自分が負のものにとらわれているときに、それを包んで捨てるというようなイメージトレーニングをすることがあります。「痛いの、飛んでけ」と同じです。科学的根拠がないおまじないのように見えますが、イメージを転換させるものの語りとして意味があるわけです。「だいじょうぶ だいじょうぶ」「痛いの、痛いの、飛んでけ」は、レジリエントなものの語りとして大事なものだと思います。



新聞の投書の例を見てみましょう。「私の兄は両手足の指が1本もない。私も1本しか指がない、障害者手帳1級と2級の兄妹です。私たちが幼い頃は障害者が外へ出るにも偏見があり、出会う子どもたちから心ないことばでからかわれた。あるとき、隣家のおばさんが『悪口を言う人が、あなたの悪い所をみな持っていつてくれるのよ』とおっしゃった」。

彼女は、このことばだけを信じるとい

うよりは、このことばで「マイナスをプラスに転換する方法」を学んだのではないかと思います。じろじろ見られるたびに、友人は憤慨するけれども、自分は涼しい顔で「美人だから見られるのよ」というふうに言う。そういうふうに変換していると、楽しい人だと言われるようになったということです。



ものの語りは多様で、一つだけの回答があるわけではありません。何かが起こったら原因を追及しなければいけないという科学主義的な考え方だけではない、多様なものの語りがあってよいでしょう。たとえば、喪失を電球が切れたという比喻で考えますと、その電球を回復しなければ駄目なんだということではなくて、回復することはできないけれども、それは放っておいて、他に照明システムを探せばいいというものの語りになります。電球が駄目なら、蛍光灯もあるじゃないか、ろうそくもあるじゃないか、あるいは星も出ているし、暗闇だって悪くないかもしれないし、もっと別の照明もあるかもしれない。要するに照明システム全体を変えれば、切れた電球は切れたままでもいいのではないかなという考え方がなります。



以上のように、ものの語りは、人生と未来を生成していく力を持ちます。そのときに、仮定法「もし、何々なら」は、とても大きな役割をします。ジョン・レノンの『イマジン (Imagine)』の歌のように。イメージの変換によって新しい世界をつくっていくことができます。それは、もう一つ大きなものの語りの役割、自己の体験世界や現前の世界を超えていく言語ゲームや思考実験としてのナラティブにむすびつきます。



ものの語りの生成力。「ものの語りの実践は、われわれが自分にとって異質の世界に住みつくように自分を鍛えるための思考実験にある」。これは、リクールのことばです。

それから「人々は想像力とはイメージを形成する能力としている。ところが想像力とはむしろ知覚によって提供されたイメージを歪形する能力であり、それはわけでも基本イメージからわれわれを解放し、イメージを変える能力なのだ」というのは、バシュラールのことばです。ものの語りは、新しいイメージをつくっていく、イメージを変えていく力をもつのです。



これは皆さんご存じの、陸前高田市の「奇跡の一本松」と私たちが名づけているものですが、これもものの語りの力で立っています。本当は、死んでしまった木を、私たちは立たせて、奇跡の一本松と名づけて、私たちのものの語りにして、モニュメントにしているわけです。こういう、私たちが生かしている、共同生成しているものの語りです。喪失してもしなやかに復活して生きていく力をものの語りはもっているといえましょう。



最後にまとめです。1つ目のお話は「『死』は、克服しなくてもいい。『死者』と共に生きていく生き方もある」ということでした。2つ目に「もの語り、ナラティブとは、経験の編集作業である。もの語りに正解はなく、多様である」ということをお話しました。3つ目に「文化のもの語りや、イマジネーション、想像力の力で、もの語りを語り直し、ものの見方を転換（ターン）してみよう」というお話をしました。長時間にわたって、熱心に聞いていただき、どうも、ありがとうございました。



シンポジウム

パネリスト

やまだようこ 師

京都大学名誉教授
立命館大学O I C総合研究機構上席研究員
ものがたり心理学研究所長

野村康治 師

ビハーラ活動推進委員会委員
社会福祉法人至心会理事長

丘山願海 師

浄土真宗本願寺派総合研究所長

コーディネーター

伊東秀章 師

龍谷大学講師
ビハーラ活動推進委員会企画研究専門部会部員



○司会

お時間となりましたので、シンポジウムを始めさせていただきます。

パネリストは、基調講演をいただきました、やまだようこ先生。ビハーラ活動推進委員会委員、野村康治先生。浄土真宗本願寺派総合研究所、丘山願海所長。コーディネーターには、龍谷大学講師、ビハーラ活動推進

委員会企画研究専門部会部員、伊東秀章先生をお迎えして進行いたします。なお、野村先生はリモートにてご自宅よりご出席いただきます。それでは伊東先生、よろしくお願いいたします。

○伊東

それでは、これよりシンポジウムを始めさせていただきます。まず初めに、私の方から先生方を、簡単にですが紹介させていただきます。その後、特にパネリストの先生方から、先ほどの基調講演を受けてお考えのこと等をお聞かせ願いながら、シンポジウムを進めていきたいと思っております。

先ほど基調講演もしてくださった、やまだようこ先生ですが、岐阜県生まれ、京都大学名誉教授であります。立命館大学O I C総合研究機構上席研究員でもありまして、ものがたり心理学研究所所長でもあら

れます。教育学博士、臨床発達心理士でもあられます。

著作は多数あるのですが、一部ご紹介させていただきますと、本日の基調講演の内容にもありましたような『喪失の語りー生成のライフストーリー』という本であったり、『この世とあの世のイメージ描画のフォーク心理学』、また、先ほどお伺いしたのですが、ついこの1月20日発刊ということでは『ナラティブ研究ー語りの共同生成』という本も発刊されたようです。全て新曜社から出版されています。

次に、野村康治先生です。ビハラー活動推進委員会の委員を務められています。浄土真宗本願寺派関係高齢者施設連絡協議会の副会長も務められています。社会福祉法人至心会理事長も務めておられまして、また、大阪市の瑞松寺ご住職でいらっしゃる。

最後に、丘山願海先生です。浄土真宗本願寺派総合研究所の所長を務めていらっしゃいます。先生方、どうぞよろしく願いいたします。

それでは早速ですが、基調講演を受けて、まず先生方から、このあたりをもう少し聞きたいということやコメント等をいただけたらと思っております。野村先生からでいいですかね。どうでしょう。

○野村

資料を頂戴してから、いろいろな思いで過ごさせていただいたのですが、たとえば、アイルトン・セナのお話を聞きながら、私は築地本願寺で葬儀を行われた X JAPAN のhideさんのことを思い出しました。

築地本願寺の夏法座のご縁の中でお話を聞かせてもらおうと、今は「hideさんノート」という本になっていますが、九州から来られた17歳の女子高生の方が、“今日やっと、築地本願寺に来て、お参りをしました、そのときにお話を聞いていたら、「お念仏をした

らお浄土で会えると聞いたので、今日からお念仏します」”と書いておられたことを思い出したりしておりました。

大江健三郎さんのお話を聞きながら、水上勉さんの『生きる日々ー障害の子と父の断章』で、おこたちが障害を持っておられて、靴の中に入っている小さな小石に、その方が痛みを感じられたということに、靴の中に入っている小さな小石は、今まではどちらかということ、自分にとっては邪魔者のようであったものが、この子にとっては、かけがえのないものだ”と書いておられるところなどのお話を聞きながら感じさせていただきました。

本当に多くのことを今日、示唆をいただいて、ビハラー活動の中で感じ得たことを、自分の中で何度も何度も聞かせていただいたような思いで講演を聞かせていただいたことでもあります。感想で申し訳ございません。

○伊東

いえ、急に振ってしまつてすいません。亡くなっていく方と、その人から、もの語りが進んでいくのかということが、先ほど、やまだ先生の基調講演でもございましたし、そのあたりについては、とても興味深いなど私も思って聞かせてもらっていました。丘山先生にも少しお聞きしたいと思います。

○丘山

それでは私が感じたことをお話しさせていただきます。基本的に私は、聞くときの大前提として、自分にとって、これはどういう意味があるかなと、やまだ先生のお話から、自分は何を学び取れるかなということをずっと考えていました。

それから、ビハラーの活動者、活動、運動、それに携わる方々にとって、今日のやまだ先生のお話は、どういうふうにおひとりおひとりが活かしていけるかなということを

大前提で、それは感じていました。
たくさん、お伺いしたいことはあるのですが、一つは、先生のお話をお伺いしていると、ある意味では個の問題、私の問題、おひとりおひとりの問題。僕たちは孤独な存在ではないのだということは大前提なのですが、焦点は個、人間ひとりひとりに当てられているような気がしました。

私は、それを少し応用して、世界のこれまでの歴史とか、僕たちの、私たちの将来。やまだ先生も、これから生まれてくる子どもたちのこともおっしゃっていましたし、死者のこともおっしゃっていました。

歴史というのは、やっぱり私たちがどう語ってきたか、あるいは語り直さなければいけないか。将来に関しても、私たちは将来の像をどういうふうに語っていくのか。語りつて本当に、やまだ先生のお話を聞けば聞くほど、もの語り、語り直していくということが、すごく魅力的、大事なことだと思います。



たとえば、これは単なる比喻ですが、昨日ちょっと読んだのですが、このところ、ずっと私のところに引っ掛かっていたのは、新型コロナウイルス感染症のワクチンを経済的先進国が独占して、何をやっているんだとは思っていました。最近そのような発言をする方が出てきているので、少しほっとしています。

それを、昨日、新聞に面白い比喻で、「村

が火事になった。金持ちが消火器を全部独占して自分の家に集めている。そんなもんだろう」というふうに書いていて、やっぱり私は、そういう自分さえよければという思いは、一つの私たちひとりひとりの中に刻み込まれていた、刻まれている、もの語りだと思います。

でも、それはやっぱり、もう駄目だとか、私たちの存在とか、それから現在の政治でもそうだと思います。政治の在り方というのも、本当に語り直さなければいけない。議論しなきゃなんていう話ではなくて、私はやっぱり、やまだ先生のことばの力ってすごいと思ひまして。世界を、政治を語り直さなければいけないのではないかというふうに、もし先生が、その応用で使ってくださいたら、ものすごく説得力があるのではないかなと。

それからもう一つ、やまだ先生の講演に出てきましたが、私がずっと気になっていたのは、もの語りを、どうやってもの語れるか。オルタナティブでひとりひとりがどのように語り直していくのか、ということですが、これは、やっぱり文化的な背景や、さまざまな歴史性などの中に生きている限り、それぞれの個性があると思ひまして。

逆に言うと、私が私の、たとえば人生を肯定的に捉え直したいな、もの語りの、もの語りたいな、死ぬときに、やっぱり全肯定で死んでいきたいというときに、その材料なしに、何か思いつきで言うのではなくて、やっぱり文化的な背景ってすごく大事だと思ひまして。

そういう意味では、浄土真宗はそれなりの、大きな真実の意味での、もの語りを持っているというようには思うのですが、ただ、それを個人個人の語りとして語り直さなければ、自分のものになっていかないのではないかなということを感じました。

それは世界的なもの語りとか、少し大げさですが、それから、やはり個人のもの語り。個人が自分の人生を語っていくときに、どのような形で、簡単に言うと、どういう材料があるのかなというのを感じていました。そこは何かお教えいただけたらありがたいなと思います。

○伊東

とってもいいのではないかと思いましたがいかがでしょうか。

○やまだ

どうもありがとうございます。野村先生のお話について、セナのお話から hide さんのお話、「hide さんノート」の話をしてくださいました。そして大江健三郎さんの話から靴の中の小石という話をしてくださいました。これこそ、まさに、もの語りがもの語りを生んでいくというか、連想が広がっていくというか、そういう、もの語り実践を、さっそく行ってくださったのだと感じてとてもうれしく思いました。

先ほど丘山先生がおっしゃってくださったように、文化の中に私たちはもの語りを持っているのですが、それが自分バージョンになるといいますか、自分の経験とむすんで語る「私もの語り」になっていかないと、なかなか人は本当には動かないのだと思います。まさに、もの語りがもの語りを生むという連想をしてくださって、個人のもの語り、私のもの語りとして語り直してくださったのが野村先生のコメントだったのではないかと思います。

そういう意味で、「あ、この話は、この話にむすびつくよ」というふうにして、ご自分のもの語りとはむすびつけていくことが、もの語りの持っている生成力ではないかなと思います。

教訓であるとか、こうしなければいけないとか、あるいは正論というのは、あまり、

もの語りがもの語りを生んでいかないところがあります。確かに正しいことを言われているのだけど、それは否定できないのだけど、「こうすべきですよ」と言われると、なんとなく反発したくなってしまったり、こちらの耳からこちらの耳に消えてしまうこともあるように思います。

例え話であつたり、そういう、私の経験もの語りだったりすると、なぜか連想が広がって行って、そして、そのまま受け身で聞くというのではなく、自分のもの語りにして、主体的に語り直したくなってくる。だから、セナの話を聞くとセナについての感想ではなく、hide さんのもの語りを語りたくなる。私の授業でも、hide さんの話をたくさん語ってくれた学生さんもありました。

そういうふうにして、もの語りが広がって行って、自分は経験したことがないことでも、自分の経験と、またむすびつけて語り直され、私のもの語りになって語られていく、主体的なもの語りになって生成されていくというところが、とても面白いところだと思っています。そういう意味で、野村先生の二つのお話は、とても興味深く聞かせていただきました。



それから丘山先生のお話ですが、おっしゃるとおり本当に、もの語りというのは個人のライフストーリー、自分のストーリーを変えていくという語り直しもありますし、それから、歴史を変えていくというのか世

界を変えていく、大きなもの語りですね。その語り直しにも、もの語り論はとても役に立つと思います。

私たちは今、わりと悲観的な未来を思い描いていますが、それも、もしかしたら使い古された近代のもの語りにこだわっているからかもしれません。ずっと右肩上がりに成長しつづけなければいけない、今は経済成長が止まっていたり、下がっているからいけない、もっと伸びていかなきゃいけないというのは、右肩上がりの神話にちょっと毒されているのかもしれないですね。

もしかしたら、成長しなくてもいいから、もっと幸せな生き方があるのじゃないかというような、今までの世界をつくってきたもの語りに対して、あるいは近代的なもの語り、あるいは進化のもの語り、あるいは成長もの語りですね。そういったもの語りに対してアンチテーゼを出していく。それが新しい歴史をつくっていく力、新しい歴史を語り直していく力になるように思います。

そういう意味では、丘山先生のおっしゃったことは本当にそのとおり。ぜひ世界をつくり直していくとか、歴史をつくり直していく共同生成の作業を、ほんの一步でもやっていきたいなというふうに、あらためて思いました。

それから、個人のもの語りについてもおっしゃったのですが、やっぱり私バージョンのもの語り、先ほど野村先生のところでもお話ししましたが、私バージョンのお話をつくっていくことによって、世界にアクティヴに関わり生成的になっていくように思います。「私のもの語り」と言うと、自分に閉じられた狭いものみたいにみえますが、逆説的に、「私のもの語り」が「私たちのもの語り」になって広がっていく力を持っているわけです。

そういう意味で、大きなもの語りも大事

ですが、もう一つ、そういう小さなもの語りといいますか、私の体験から出てきたもの語りが、他の人の体験のもの語りともずぶずぶついていくような広がり方があります。個人のもの語りとおっしゃった、そういったもの語りの力というの、あらためて感じたところです。どうもありがとうございます。

○伊東

ありがとうございます。先生方に今いろいろなテーマを出していただいて、その中でも本当に全て、恐らく先生方もまだまだ話し足りない部分があるという状況かなと思うのですが、いかがでしょうか、どのあたりから、もう少し話を進めてみたいとか、今のそれぞれの先生方の話から、この話をしたいと、そういうことは何かありますでしょうか。

○丘山

では、よろしいでしょうか。一番先に申しあげたように、ビハーク活動をしている方々にとって、今日のやまだ先生のお話はどういうふうに、それぞれの方が実践的に、応用と言うとおかしいですけども、自分のものとして今後の活動に生かしていけるか。それを少し考えたいなというふうに、あらためて思いました。

私以外は野村先生も、もちろん先生もそうですけど伊東先生も、皆さん実践の場を持たれているので、そういう実践の中で、どういうふうに生かしていけるのかな。生かすというか、僕は根本だと思います。そこらを、実践なさっている先生方からお話を伺いたいです。

○伊東

そうですね、ビハーク活動は、最初にオープニングの映像でも歴史が流れていましたとおり、1987年以降、仏教者の社会活動として広がってきたわけですが、もともとは

現在の緩和ケア病棟、がん患者を中心とした、積極的な治療が難しい患者さんへの仏教者によるケアというのが一番、最初であり、田宮仁先生が言い出したのがはじまりです。

その後も、特に浄土真宗本願寺派が全国に展開していく中で、終末期以外にも、社会福祉的な場面でも、そのような活動は必要だということで推進され、現在では、今述べた緩和ケア病棟のみならず、特別養護老人ホームや、それこそ野村先生の施設であったり、いろんな場所で社会福祉的な実践をされていると思います。



オープニングの映像でもございましたが「ビハーラ活動 30 年総括書」というものを最近発刊され、それに私も少し関わらせていただきましたが、その中での実践では、高齢者の入居者さんと活動者が話す活動の中で、いわゆる傾聴という活動であったりとか、レクリエーションをして利用者さんとか、楽しい時間を持つということであったりとか、散歩に行くとか、いろんな活動を全国で、教区ごとでそれぞれの色は違いますが、ビハーラ活動を展開されているなというのが概観かなという感じです。

特に、先ほどのお話を聞きながら、対話の中で、どういうふうに死に関するものの語りを超えていけるのかということであったり、そのあたりが、活動者と利用者であったり、もしくは家族であったり、いろんな立場があるかなと思うのですが、私も非常に興味

深いなと思って聞かせていただきました。

○丘山

やまだ先生にお伺いしたいのですが、遊び半分ではなく、本気で、もの語りたい、自分を。そのときに一人でするものなのですか、語り合いながらつくるのですか。つくるといっても簡単につくるという話ではないのですが、そのあたりを教えていただきたいです。

○やまだ

人は個人じゃないと言いましたけれども、本当に語りというのは聞き手が必要なのですよね。

○丘山

そうですね。

○やまだ

ええ。だから私たちは、たとえば壁に向かって語れと言ったら、もうとても語れませんよね。

○丘山

そうですね。

○やまだ

今は遠隔だけど、それでも聞いてくださる人がいます。そういう人に向かって、やっぱり語るわけですよね。だから聞き手は必ず必要で、たとえモノログであったとしても、もう一人の私が聞いているというかたちになります。だからもの語りの共同生成というのは、話し手と聞き手のまさに、その真ん中にももの語りができてくるという感じですね。

○丘山

期待していたなんて言うと失礼ですが、まさにビハーラ活動の一つって、それが大きいと思います。

○やまだ

そうですね。

○丘山

そのときに、私は昔から、真宗に来る前か

ら、自分が死ぬときは、悲しかったことも苦しかったこともひっくり返して、ああ、生きていてよかったなと思って死にたい、人生を全肯定して亡くなっていきたいと。

そのときに自分一人では、そういう痛みとか何かがあると、そういう総括はできないとしたら、僧侶が、誰かがなんですけど、今で言えば、やっぱり僧侶が、そういう役割を果たしていかなければいけないというか、果たせるのではないかなと。

野村先生、私が亡くなる時は、私のそばで、私の人生を全肯定できるようなものの語りを先生がつくって私に話し掛けてくれると。本当に、もうこちらはしゃべれないのですから、ぜひお願いいたします。

○野村

僧侶自身も、やはりご門徒さんに、ずいぶん育てられていくということが多いです。ご門徒さんが亡き人のことを語ってくださることばは、お仏壇の前で遇うことが多いです。実はビハーラ活動自身も、先ほど伊東先生におっしゃっていただいたように、淀川キリスト教病院での実習でございましたし、当時は緩和ケア病棟との言い方もなく、ホスピス病棟でした。

今、その淀川キリスト教病院も地域医療連携センターをつくられており、単に病院の中だけの緩和ケアというような感覚はありません。在宅ということばがいいのか、そのお方が日暮らしをしておられる現場を大事にしていくということの方がいいのか、分かりづらいですが、ビハーラ活動をされている方々は、ご自身の生活の環境の中で、その活動をなさるといえることが多くなっていると思います。

ただ、福祉の、介護保険の教育カリキュラム等々は、どうしても日本は、死んだらおしまいということが多いので、ケアマネジャーさんも亡くなるまでは一生懸命ケアプラ

ンをつくられるのですが、その愛しい方を亡くされたご家族の方々が、その後どういう思いで受け止められるかというケアプランの作成は、日本にはありません。

でも私は、その地域で暮らしている者であるならば、1年後、仏花を持って村を歩いておられる方があれば、「ああ、今日がお連れ合いさんのご命日でしたね」と声をかけられることが大事だと思います。

たとえば同級生で結婚をした方に教えていただいたことですが、お連れ合いを突然病で亡くされた後、お仏壇をお迎えになられ、七回忌をすぎたある日お参りすると、お仏壇の前にランドセルが供えてありました。私は同級生に、「このランドセル、お孫さんにどのように渡すの？」と聞いたら、「それは野村君、これはおじいちゃんとおばあちゃんからやでと言って渡すよ」と私に教えてくれました。



お孫さんとおじいちゃんとは、今生では出会っておられません。お連れ合いを亡くして、お仏壇をお迎えなさったお方が、わが子の成長とともに孫に会うときに、孫に買ったランドセルをお仏壇に供えて、そのランドセルをお孫さんに渡すときに「おじいちゃんとおばあちゃんからやで」と渡されるということばに出遇わせていただくのが僧侶なのかなという思いを持ちました。日々、どのほど、このお仏壇の前で彼女が思いを持ってお念仏をしていたのかということにも出遇わせていただきました。

僧侶自身も実は、こういうご門徒の方々の往生なさったお方をしのばれることばと、生活の中で紡がれていく心に育てていただく。今日の先生のことから申せば、もの語っていただいていることばに出遇わせていただいたときに、経典のことば、文字は何も変わりませんが、そのおことば自身が私の胸中で響いてくるところが変わってくるのだろうというふうに思っております。

そういう意味では、それはご門徒の方々や、お出会いさせていただいた方々のおことばにお育てをいただいて、僧侶でいさせていただいているのだなと思ったことでございます。

○伊東

ありがとうございます。本当になんというか、死の間際に僧侶やケアマネジャー、それこそ寺院が地域にあるということが、その紡いでいくキーになり得るのかなと思いつながりながら聞かせてもらいました。やまだ先生、いかがでしょうか。

○やまだ

野村先生、丘山先生、素晴らしいお話を聞かせていただきましてありがとうございます。



私の授業を受けられた僧侶の方がおられて、その方は、何代か家業として受け継いできたので、どうも僧侶としての自分に自信もないし、それから、お葬式仏教をやるのも疑問があるというふうに思っておられました。でも、このナラティブの授業を受けてか

ら、「私はこれから、ナラティブ・プロデューサーとして生きていきます」というふうにおっしゃって、とても元気になりました。

僧侶というのは本当に、地域の人びとをむすぶ語りの場をつくるお仕事ですね。お葬式の間もそうですし、その後もそうですし、その語りの場をつくっていく、ある意味でプロデューサーとしての役割があるのではないかなというふうにおっしゃっておられました。その話を今思い出しましたが。

まさに、もの語りというのは自分一人で紡ぐものではなくて、それを語る人々、あるいは語りの場というのがあって、その中でもの語りがつくられていき、そして、その人のことをあまりよく知らなかった人も、「ああ、この人はこういう人生だったんだ」と、そこからまた学ぶものがあつたり、その人の病や死から贈り物を勝手に受け取るというか、プレゼントされるということがあると思いますので。

そういう意味で、亡くなっていくプロセスを、一緒に見守っておられるケアの方もそうですし、葬儀の間も、その後、死者についてどう語るかということも全部含めて、すごく大事なことだなというふうに、あらためて思わせていただきました。

それから、ビハラー活動とどうつながるかということですが、私もビハラー活動にあまり詳しいわけではないのですが、緩和ケアの医療の方々とお話しする機会はわりとありまして、そのときに、やっぱり大事なのは、あとどれだけ生きられるとか、そういった医療的なものも大事だけれども、基本的に、本人が自分の人生や生きることの意味みたいなものを自覚できることが幸せ感を生むのだと感じさせられます。人は本当に、生きる意味を求める動物なのだと思いますね。

だから「どうして、よりによって私がこの病気になったのか、なぜ、あの人でなくて私だったのか」というような、誰にも答えが出ない問いを延々と考え続けるのではなくて、「今は病を得てしまったけれども、この私が今生きていることに、何か意味があるんじゃないか」と考え方を転換する。

あるいは、今、私ができることで何かメッセージが残せるとか、あるいは、できることがあるんじゃないかとか、あるいは、明日まででいいから、明日は娘さんが来るから、それまででいいから生きていようとか、あるいは、桜の花が咲くまで生きていようとか、いろんな意味があると思うのですけれども。

そういう意味があると人は希望を持つことができて、希望を紡いでいくことができる。それが意味、人によって、どういう意味を生成するかはいろいろですが、それをつくるのがナラティブなのかなというふうに思いながら聞かせていただきました。

○伊東

ありがとうございます。

○丘山

素晴らしいなというか、私たちは、それをあまり自覚していないんじゃないか。今、やまだ先生がおっしゃったこと、ビハーラでも一生懸命、皆さんなさっていて、それをより多くの人に。それをやっている人とか、そういうのを超えて、終わりを迎えているような方のそばにいるどなたも、そういう役割を果たせるんじゃないか。

今、僕が残念に思うのは、日本はそういう文化がすごく希薄になってきていて、だから今こそ、やまだ先生のおっしゃったような、そのことばそのものでお伝えしていく、実践していく。私はもう、今日は120%おなかいっぱいです。今のおことばで本当に、僧侶っていいな、そのナラティブ・プロデューサー、その彼が素晴らしいなというか、僧侶

としての知識とかなんとかいうのではなくて、そういう思いこそ僧侶だというふうに僕は感じましたね。素晴らしい話をありがとうございます。いやいや、参りました。ありがとうございます。

○伊東

私も、本当に大事なお話だと思って聞かせてもらっています。今のお話の中で、一步踏み込んで言うのが、すみません、ちょっと焦点がずれているかもしれませんが、どういう僧侶であり、ビハーラ活動者であり、近しい人が、語り直しをする上で重要なのか。この人であれば私は話していいと思える、もしくは、語り直しやすい条件というのが、どういうふうにすれば高まっていくのかなということも考えたりしていました。

それは、やまだ先生の先ほどからのご発表を受けながら、本当に広い方法を提示されているなと思いまして、たとえば、たとえ話であったり、仮定法であったり、もしくは自分のもの語りを話すとか、いろんな材料をわれわれに提示いただいたかなと思いながら、それをどう応用していくかということも、すごく大事なのかなと思ったりして聞いてはいました。

どうですか、野村先生。現場の話というと、野村先生に振りたくなる思いがありましていかがでしょうか。

○野村

今日、もの語りは多様であるというふうに先生におっしゃっていただいたのですが、きちんと、そのお方のことばを聞き届けることが、ビハーラ活動の現場では大事であると思います。

もう一つは、あまり自分の活動を思い上げることなく地道に、その活動を継続していくことが非常に大事であると思います。今回のコロナ禍で言うと、たとえば、ご家族であったとしても面会等々も厳しい中でも、

ご家族でないお方で、本当にこのお方が、この利用者にとって面会していただくことは非常に必要なのだなと感じるということがございました。児童養護福祉施設でお育ちになったお方が、ご往生になるということがあったのですが、平安養育院の園長先生が代々、もう何代も替わっておいででございますが、ご往生にさいしお通夜、葬儀にお参りをくださいました。このお方は浄土宗の施設におられたお方ですので、本当にお念仏、「南無阿弥陀仏」が、よう出てくださるお方でした。

そこで語られた話は、相談員として関わってこられたお方が、次の職員さんに、次の職員さんにと、そのお方のことが語られたお話にも出遇わせていただいて、小学校のときにスケートをしていて、外国の方とぶつかられて骨折されたときのお写真、そのときに海外の方がお見舞いなさったお写真等々が、葬儀のときに御供えされました。そして調理師の方までおひとりおひとりが、そのお方の人生を語られるという場面がありました。

実際、そのお方のケアマネジャーに関わっていた者も、葬儀の時お参りされて「その場で語られていた、自身が知る前のその方の人生にふれたことが、今後のケアマネジャーとしてのあり方を考えることになります。」と話されていました。ご往生の後も記録が残されるということはありませんが、ビハーラの活動の中では、大事に聞き届けていけると思います。今回、私と一緒にお参りさせて頂いた職員は「養育院の施設長さんや相談員さんと会えたことが、介護にかかわる者として大切にしていきたい心だ」と話していました。

もの語りが多様であるという、このことばも今日、先生のおことばで聞かせていただいたものの中で、私は本当に大事にさせ

ていただきたいなという思いを持っているところです。

○伊東

とってもいいのではと思います

○やまだ

先ほど、ビハーラ活動の中で、どういうふうに語りを聞いたらいいかみたいなお話がありましたが、従来のカウンセリングですと受容と傾聴と共感というようなことで、それは基本ですが、ナラティブ・アプローチだと、もう少し積極的に語りの場をつくる。それこそナラティブ・プロデューサーじゃないですが、そのようなことを考えます。

それは、相手から語りを引き出すとか、そういうことではなくて、インタビューする、インターして見るわけなのでインタビューといいます。ただただ傾聴して「そうですね、そうですね」で話が進んでいく場合もありますが、なかなか語れないことも多い。なかなか語りが続いていかないという場合もありますよね。

そういうときにですが、やっぱり相手との共同生成、もの語りは、インタラクションして間にできてくるものなので、こちらのちょっとした問い掛けで語りが出てくることがあります。

その一つに、「たとえば」ということばがあります。どうしても私たちは、ことばで語るときに、きれいなことばというのか、少し概念化した大きなことばで語ったりします。それをすごく具体レベルに下ろしてもらって、「たとえば、どういうときですか」とか、「悲しい」とかおっしゃったら、「たとえば、どういうときですか」とかいうふうに、具体的なお話をできるだけ聞く。

そうすると、同じ「悲しい」ということばの中にもいろんな悲しみがあるでしょうし、こちらが受け取っていたものと、本当はズいぶん違うことをおっしゃっているのかも

しれない。だからことばって本当に不自由なもので、とても素晴らしいものなんだけど、ことばで言われたら、こちらでは理解したつもりでいても、そうじゃないことはありますよね。

それから、できるだけ具体的なことで語っていただいた方が、ああ、なるほど、こちらにも、腑に落ちて分かるということがあります。私がインタビューのときに、なかなか進まないときは、あるいは相手がおっしゃったことばをもう一回、こちらで繰り返しますが、ただ繰り返すだけではなくて、もう少し、そこから奥へ行くために、インターしていくために、「たとえば」を使うことがありますね。

○丘山

私は、やまだ先生に感化されて、こう行くわけではないのですが、すごく共感することばかりです。

私はビハラの会に出させていただくと、傾聴、傾聴って強調し過ぎるのではないかなと思っていました。それは、僧侶とか宗教者というのはそもそもおしゃべりだから、黙って人の話を聞けという意味では、こっちからこっちに振っているのは分かるのですが。

でもやっぱり、今日参加なさっている方は、先ほどの、今のやまだ先生のお話からも感じられたと思いますが、もの語りって、語りの中で語られてくる、つくられてくるという。だから、一方通行で聞くだけでは、もの語りはできない。それと、そういう意味では本当に一歩踏み込んでというのも、時には必要なと。

それから、これは宗教者としてではないのですが、大学にいるころからそうなのですが、学生が相談しにきたときに、いろんな話を聞くと、それは何か、自分が生きることを考える材料になるというふうに、僕がそ

れで得をする。相手も、もちろん得をしてももらわないと困るのですが。

だから、共に成長していくなんて、そんなきれいごとではなくて、ある意味では僕の人生を考えるのに、こいつの悩みを聞いていると面白いなとか思っ。正論じゃなくて、こういうふうにあらねばならぬというのではなく、なにか聞きたいなとかいう思いも大事なんじゃないかなと思います。

それから、それこそビハラ活動をやっている僧侶の方々、特に一生懸命やっている方々にお伺いしたい。私は、ある有名な作曲家がちょっとした知り合いなんです。その人は、脳の何かのあれで、だんだんしゃべれなくなっていて、でも意識ははっきりなさっていて、すごく聡明な方で、仏教とかキリスト教をどうのこうのと言うのはあまり好きじゃなくて。でも僕は、とても宗教的な人だなというふうに思っていました。

3、4回しか会ったことはないのですが、奥さまから知らせがあつて「主人が丘山さんと話をしたいと言っています」と言われました。でも彼は話をできないのです。で、3回か4回しか会ったことがないので、私は困って、でもお断りするわけにいかないじゃないですか。

そのときに、もう、しゃあない。三善晃という作曲家ですが、彼がご病気になられた後、桜が彼は好きで、桜の咲く季節に私、1回だけ車にお乗せして、近くの公園へ行って、ゆっくり車を。彼はすごくうれしそうにしている、珍しく明るい。すごく思索的な人なので、あまり笑顔はないのですが。

もう一つは、私が仕事で草津へ行く途中に、彼は夏、軽井沢にいたので、行ったときに、もうご病気はかなり悪かったのですが、すごくいい顔をして。私は間違っ。お話しして草津まで行って、あ、先生の写真を撮りたいと思って、「戻っていいですか、もう

一回、ちょっと」と言って、彼も奥さんも喜んでくださって、写真を撮らせていただいた。

その思い出、僕は二つあって、もう一つが、このお話、出来事、僕と彼との出会いのお話を彼に語りかけよう、彼にも思い出してほしい。きっと彼も、桜のあの風景を思い出してくれるんじゃないかなと思って雑談なんかをしながら、雑談というか一方通行ですが。

あれは奥さまが隣にいらっしゃったので、先生に関するお話を奥さまと二人でしながら、先生の生きざまを語っていく。だから場合によっては、お話をできない方だって、私たちは、そういう方とも語り合えるというふうな気がしました。

だから、あまり傾聴、傾聴というのではなくて、傾聴が基本だと、でも傾聴の中で、やまだ先生のおことばを借りれば、その方の人生を共にもの語っていつていただきたいなと。ビハーラ活動は素晴らしい活動だと思いますので、そんなものも、これから少し自覚的に取り入れたら素晴らしいのではないかなと思います。

○伊東

ありがとうございます。今のお話を聞きながら、先ほどの野村先生のお話もそうですが、施設の中での臨床の中で紡いでいたこともそうですし、丘山先生のお話でも、なぜ、そのご友人が丘山先生と話をしたいんだというふうに言ったのかなと。

そのうまくいったポイントみたいなのは、僕は聞きながら、出会いから、その後のコミュニケーションであったり、施設の中でのミーティングの方法とか連携とか、それまでの空気づくり方とか、そういうものなのかなと想像しながらお聞きしていたのですが、どうですか、ちょっとお聞きしてもいいですか。

野村先生、どうですか。どういうふうなコミュニケーションが紡いでいけるコミュニケーションになるのかなというのが気になりました。

○野村

最後のまとめでもおっしゃってくださっていましたが、一つのパターンで何かの正解を導き出すということではないと思います。本当におひとりおひとり、それぞれに人生を送っておられますし、その中で、いろいろな方と出会われたものが蓄積された、そのお方がご往生になった後で、また発露されてくるといことがあります時に僧侶は、「それは浄土真宗の教えではない」とか「親鸞聖人のおことばに、どこにそんな証拠があるのだ」というようなことにとらわれてします。もし悲しみの場でこのようなことになる大変なことになってしまいます。

実際にビハーラ活動を続けてくる中で、教義的解釈というものと、現場で悲嘆を抱えておられる方について、正論、正解だけで「こうすべきだ」にならないように、自分自身はこれからも努めてまいりたいという思いで、今日は最後のまとめも聞かせていただいていたようなことでございました。

○伊東

どうですかね、丘山先生は、何かそのあたりで思われるところはありますか。

○丘山

私は、基礎的な学びは必要だと思います。基礎知識。ビハーラでも、無手勝流というか自己流でというのはあり得ない。ただ、それはやっぱり、ある程度学んでいけるのは技術だろうと。もう一つは、もっと根っこにあるのは、志とか、人に対する、いい意味での関心。それなくして成り立たないのではないかなというふうに思っています。

たとえば、僕はそんなに善人ではないのですが、やっぱりひとりひとりには人生が

あって、仏教的に言うとカルマ、悪い意味ではないんですよ、カルマ、経験のトータルでひとりひとりが生きてきているんだと。

だから、今日のやまだ先生のお話で言えば、その人、ひとりひとりにもの語りがあるんだけど、もの語りとしては紡がれていないことが多いかもしれない。だけど素材としては、ひとりひとりの方って、やっぱり素晴らしい生き方をしている。

嫌な人だななんて、みんな思っている。僕も何か、ふと思うときはあるけれども、やっぱりこの人にはこの人の、全ての人生が今をつくっている。そういう意味で、僕はすごく、いろんな人に、悪く言うと関心というか興味があって。

○伊東

いや、悪い意味ではないんじゃないでしょうか。

○丘山

だから、これがなければ駄目だという話ではないのですが、私の場合には、そんな、人に対する関心。だけど、もちろん勝手なやり方は駄目だなというのは重々承知しているつもりです。そんなことですかね、感じるのは。

○伊東

私も心理士として、今のお話を聞くと、ナラティブでよく言われるような、無知の姿勢という言い方をしたり、not knowing と言ったりするのですが、相手のことを知っているという前提に立たずに、先ほど、やまだ先生も「たとえば、どういうこと」というふうにおっしゃっていたように、分からないから、もう少し教えてほしいというような、相手に興味関心を持つみたいなことを、ナラティブ・アプローチでは not knowing、無知の姿勢という言い方をしたりするので、それに通じる、丘山先生のことばだと、人への関心なんだなと思って聞かせてもらって

いました。

○丘山

食欲な関心。

○伊東

食欲な関心ですか。

○丘山

そう、テクニカルじゃないんです。

○伊東

そうですね、ちょっときれいなことばで言うと not knowing ですが、丘山先生のことばでは「食欲な関心」なんですね。

○丘山

おせっかいなんです。

○伊東

でも、そのバランスが、僕は聞きながら、とても大事なのかなと。今の野村先生の話でも、やまだ先生の講演にあったマスター・ナラティブと、そうじゃなくてオルタナティブな、目の前の現実と、ということを、どうすり合わせるかというのは、とても大事な話だなと。

特に僧侶、真宗に関する人は、浄土真宗に関する思いが強いので、そのことが、どういうふうに目の前の支援につなげていくかというのは、とても大事なところなんだなと思いながら聞いていました。

残り5分少々となりましたが、やまだ先生、このあたりのお話はいかがでしょう。



○やまだ

いろいろ実践の中から語られてこられる、野村先生や丘山先生のお話を、とても興味深く聞かせていただきました。

今の人に対する関心ということですけど、私も本当にそう思いまして。たとえば、認知症のおばあちゃんのケアをしていて、そうすると「どうして何回言っても分からないの、また」みたいな気持ちになりますが、そうではなくて、そのひとりひとりに、単なるおばあちゃんではなくてひとりひとりに、やっぱりもの語りがあって、人生があるというふうな見方をする。

「ああ、おばあちゃんも大変だったね。戦争をこうやって乗り越えてきたんだよね」とか「一人息子さんを亡くされて頑張ってきたんだよね」みたいな見方で今のおばあちゃんを見ると、もう全然、その人に対するリスペクトというか尊敬の念が違ってきて。

今までは何もできない駄目なおばあちゃんだったのが、一転して「ああ、こんなに生き延びてきた。よく生き延びてきたね、ここまで」という気分になりますよね。だから、そういう意味でも、その人に関心を持つということは、すごく大事なことなのではないかなというふうに思っています。

それから、もの語りを聞くということですが、今日、仮定法と言いましたが、もう一つ、「もし…だったら」というお話をしたのですが、これも単なるテクニックではなくて、使える場面がすごくあるような気がします。

ナラティブ・アプローチの中には未来語りというものがありまして、未来についてのお話をしてもらうんですね。私もビジュアル・ナラティブでイメージ画をつくったり、コラージュをつくったりしているのですが、必ず未来のもの語りを語ってもらうようにしています。

どうして未来かというと、「未来はまだ何もないから語れない」と言う人は多いのですが、たとえば1年後みたいに、わりと短い短期の未来を想定してもらって、そのときは今よりも、こうなっているだろうとかいうふうに、少しポジティブなもの語りになっていくんですね。

不思議なことに、絵を描いてもらっていてもそうなんですけど、未来を語るときに、たとえば「私の未来は真っ暗闇だ」とか言っている人でも、絵を描いてもらおうと、いくらなんでも全部を黒で塗りつぶしたくないんですね。そうすると、雲の向こうにお日さまが照っていたり。

それを自分で見ると、「ああ、私の人生はまんざらではないかもしれない」とかいうふうに、少しポジティブな気持ちになるんですね。そういうふうにして、少しポジティブなイメージが思い浮かぶような未来を想定してもらおうと、今、現在がポジティブな気分になっていくということになるかと思います。

体がそっちに向かっていくというのか、アクティブになっていくというのか、共同生成と言いましたが、インタラクションというのは、お互いにインターしてアクションしていることですから、まさに共同行為でもあるわけですね。

そうすると、一緒に未来の話をしながら、「もし、こうだったらいいね」というような話をしながら、一緒に体が未来に向かっていく。そうすると、過去に向かって嘆いていた体が少し前向きになる。まさに前向きになるんですね。そういったことに使うためにも、「もし…だったら」という仮定法の語りも役に立つかなというふうに思いました。

○伊東

ありがとうございます。未来について語るということは、今までの語りとも変わる

きっかけになったりもしますし、ナラティヴの中で、自分の死んだ後の語りをするとか、そういうのもあったりしますね。少し広がるような気がしました。

すみません、もう話をしていると、あっという間に1時間がたちそうなところでして、時間がそろそろ終わりになります。最後に先生方からお一言ずついただければと思っていますのですけれども、いかがでしょうか。

○丘山

じゃあ、私から。今日、学んだ中で、さまざまありますが、やっぱり一つは、仏教のことをちゃんと締めくくらないといけないと思っています、それはこういうことです。

先生の資料 19 枚目の、「文化×聖なるもの×私のもの語り」となっていて。私は、これは勝手に、また改変してしまうのですが、ベースに文化とか広い意味のもの語り、小説とか音楽とか、広い意味の文化。それから聖なるものは、やっぱり思想とか宗教ってあると思います。そういう背景の中で、私たちはひとりひとりのもの語りを生きていき、それを自覚的にナラティヴにしていける。もの語りとして。そして自分の人生を意味つけていくと。

そのときに、やっぱり聖なるものが果たす役割も大きいと思います。これは、ほとけさんの教え、あるいはキリストの教えとか、そういうものなんだなと思います。そこが自己流だけではない深みを、そのひとりひとりの人生に深さ、重さをもたらせてくれるのではないかと思います。それは、私がそういうふうと思うというのではなくて、私はそういうふうにして、ああ、仏教をこれからまた考え直せるなというふうに思いました。

もう一つ不思議だったのは、やまだ先生が大江健三郎を引いて、「死は終わりではないんだよ」というのを簡単に、ごく自然にお

っしゃってくださったのは、とてもうれしいというか。私らは、何か教条的に「お浄土に行くんですよ、終わりじゃない」と言っているような面があって。そうじゃなくて、もっと自然に、僕らはそういうふうに語れる文化にしていかなければいけないなと。

浄土真宗の教えというのは、ある意味では、そういう人類の叡智を、そういうふうに表示しているような気がするんです。死は終わりじゃないんだという。そんなことを学ばせていただいて、本当にありがとうございました。

○野村

もう全てまとめていただいたことでありますが。本当に、活動されている方は、今回のコロナ禍の中で葛藤も多いとは思います。親鸞聖人も、ものすごくお手紙を書いておられまして、お父さんを亡くされたお方にも看取りをされた方にもお手紙を書いておられます。

先ほど申したように私は淀川キリスト教病院の地元でございまして、病院に入院された経験のある高齢者、施設入所の方々のところには、チャブレンさんからお手紙が届いていることであります。もし現場に行くことが厳しいということであれば、ぜひ活動者の方も、今まで関わってくださった方々へのお便りをたくさんお書きいただいて、また、そのお手紙のお返事から酌み取られることを大切にしていきたいです。

それが、ご本人さんへのお返事が、介護者や介護職員の方に聞き取られていく。手紙から受け取られたものを大事にさせていただいて、また面会ができたときに、季節を感じながら、ことばというものも大事に、紡いでいっていただけたらなという思いです。やまだ先生のお話を聞きながら、少し私の感想として持たせていただいたことでございました。ありがとうございました。

○やまだ

ありがとうございました。本当に私もいろいろ学ぶところの多いシンポジウムでありました。ありがとうございました。

「ありがとう」とか「おかげ」というお話はしたのですが、「幸せ」ということばも、「する」と「合わせる」「仕合わせ」が原義です。先ほど共同生成と言いましたけど、インタラクション、一緒にインターして、一緒に紡いでいく。「仕合わせ」とは、することと合わせること、縦糸と横糸をあわせて織物を織っていくような、イメージになるかと思います。

日常に使っている「ありがとう」とか「おかげさまで」とか「幸せ」ということばが、どんなに深い意味を持っているかということ、今また、もう一度かみしめているところです。本当にありがとうございました。

○伊東

先生方、本当にありがとうございました。それでは、このシンポジウムは、これで終わりにさせていただければと思います。本当に皆さま、ありがとうございました。おつかれさまでした。

ビハーラ活動の今後に向けて



第17回ビハーラ活動全国集会実行副委員長
ビハーラ活動推進委員会委員

木 曾 隆 師

ビハーラ活動推進委員会では、親鸞聖人ご誕生850年・立教開宗800年慶讃法要に向けた中長期計画を建て、第一期計画は「ビハーラという生き方を紡ぐ」をテーマに2018年から2020年、今年度まで活動してまいりました。その締めくくりとして第17回全国集会を計画し実施することになりましたが、新型コロナウイルス感染症のためこのようなオンライン開催という集会になりました。また去年はビハーラ活動30年総括書を発刊し、ビハーラ活動30年の歩みの課題と今後の展望を発信しました。

そして2021年度より2023年は親鸞聖人ご誕生850年・立教開宗800年慶讃法要を見据えて、第2期のテーマとして「日常の中にあるビハーラの種を見出す」としました。

思い通りにならない人生を私たちは生きています。特に現在は新型コロナウイルス感染症という目に見えないものに不安を抱え、新しい生活様式が求められています。ビハーラ活動も施設や病院での活動が大幅に制限され、今後の展望が見通せません。ビハーラは私たち誰もが抱える生老病死に関わることによって新しい気づきや発見があります。そして今、医療や福祉の中で私たちのビハーラ活動が求められています。例えば昨年12月コロナ禍の中でも長岡にある晴麗看護学校より「死の看取り」と題して看護師を目指す300人余りの学生に講演を依頼されました。また長岡西病院ビハーラ病棟での活動を通じて他の病院の医師や看護師とも交流が出来、燕労災病院の中塚医師（外科医師）より苦悩する患者さんがいるので、是非個人面談してほしいと依頼され実施しています。このように私たち念仏者が苦悩をかかえる相手にあたたかく寄り添う関係を築くことが期待されています。そしてそれは病院や施設の中だけの活動ではありません。私たちの周りに沢山の苦悩をかかえて生きている人々にも眼を向けなければなりません。日常生活の中でお互いに出来る事、支えあうことを見出し積極的に活動していこうではありませんか。

みほとけの大きなお慈悲をよりどころとする私たちのビハーラ活動はお互いにみほとけの慈悲につつまれている「いのち」であることに気づかされます。このかけがえのない「いのち」を苦悩の中で生きなければならない私たちの現実の中に、ビハーラの種を見出し育てていく期間として第二期計画をお互いに実施していきたいと思います。



第17回ビハール活動全国集会 開催報告書

1. テーマ 「願われないのちの物語を紡(つむ)ごう」
～悲しみの中にある人びとにぬくもりを届ける～
2. 趣 旨 ビハール活動とは、本来仏教が実践課題としてきた生老病死の苦悩に応えるため、医療・介護・福祉などの各分野とも連携し始められました。そして今、その活動は、一人ひとりが自らの生き方・在りようとしてとらえるビハール運動に成熟しつつあります。その意味で、ビハールという生き方は、仏教理念に根ざした自らの実践道としての歩みでもあります。その歩みを一人でも多くの方々に紡いでいきましょう。
3. 主 催 浄土真宗本願寺派
4. 主 管 第17回ビハール活動全国集会実行委員会
5. 日 時 2021(令和3)年1月30日(土) 13時～16時
6. 開催方法 オンライン全国集会として開催(配信会場: 聞法会館)
※1月7日・13日の緊急事態宣言の発出に伴い、教区への集合を取りやめ、YOUTUBELIVEでの視聴プログラムのみとして配信
7. 募集対象 (1)各教区ビハール活動者
(2)浄土真宗本願寺派関係高齢者施設連絡協議会会員施設関係者
(3)西本願寺医師の会会員
(4)ビハール活動に興味のある方
8. 申込者数 309名(社会部受72名、教区237名)
9. 視聴者数 203回線(9教区は教区会場にて視聴)
10. 参加費 無料
11. 基調講演 講師: やまだ ようこ 師
(京都大学 名誉教授・立命館大学 OIC 総合研究機構 上席研究員・ものがたり心理学研究所長)
講題: 喪失の語り-しなやかに生きる-
12. シンポジウム パネリスト: やまだ ようこ 師
野村 康治 師
(ビハール活動推進委員会委員、社会福祉法人至心会理事長)
丘山 願海 師(浄土真宗本願寺派総合研究所長)
コーディネーター: 伊東 秀章 師
(龍谷大学講師、ビハール活動推進委員会企画研究専門部会部員)

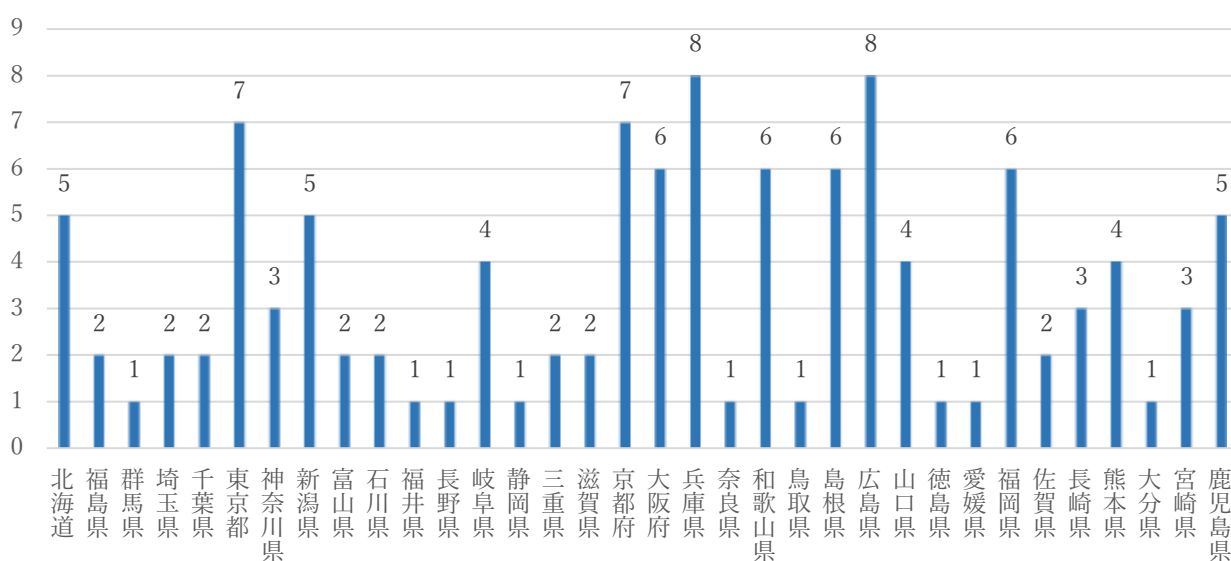
以 上

アンケート集計

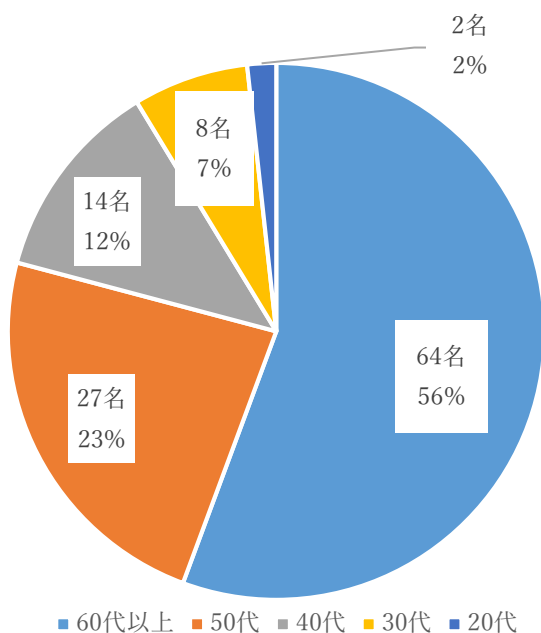
第17回全国集会開催終了後、URL 通知並びに QR コードによるアンケートを実施し回答数は115件であった。

なお、記述式の設問については多くの回答をいただいたことから、抜粋としている。

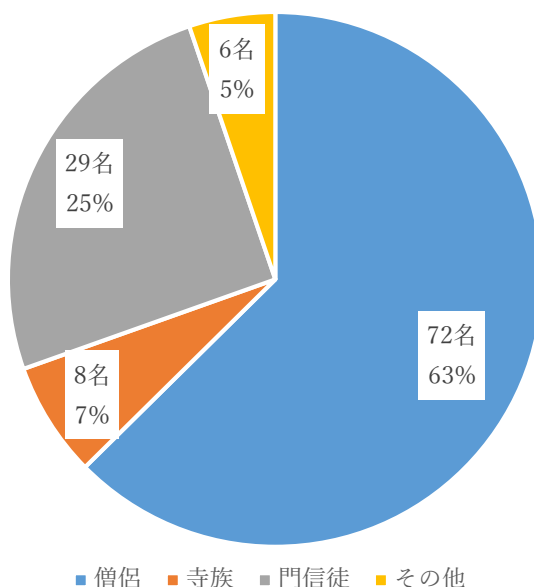
お住まいの都道府県を記入してください



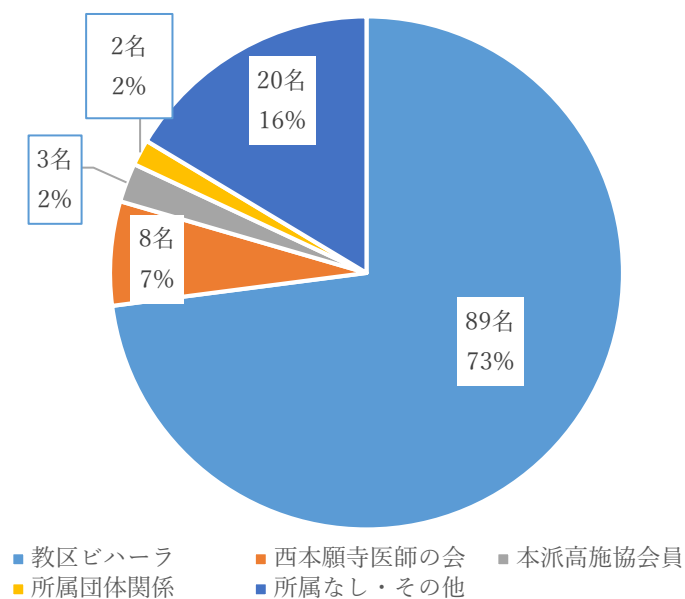
年代を教えてください



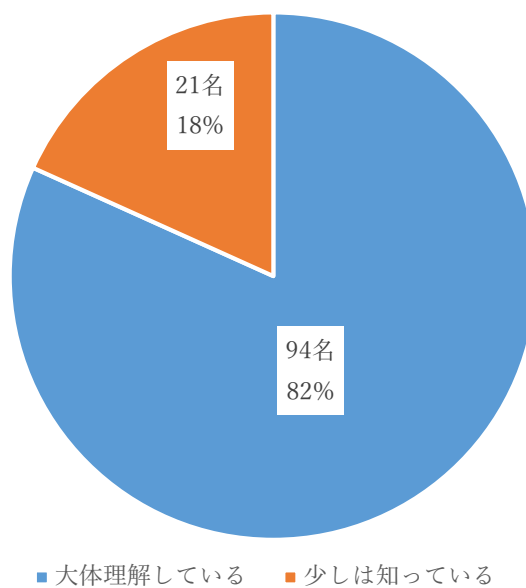
区分を教えてください



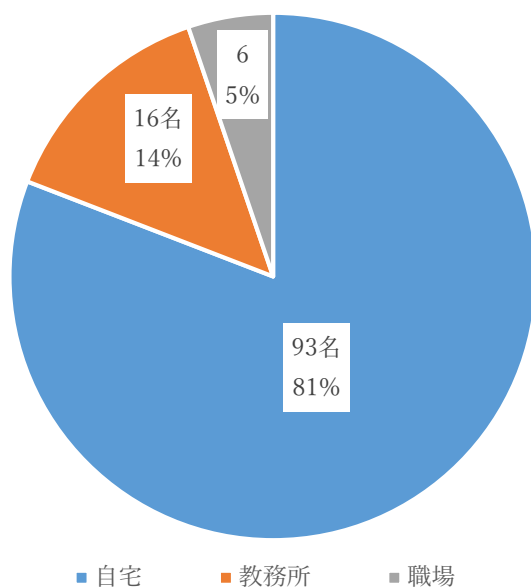
所属を教えてください（複数回答可）



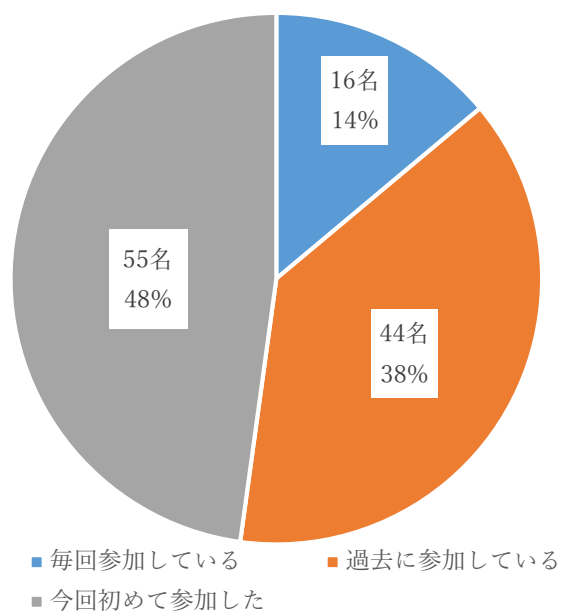
ビハーラ活動をご存知ですか



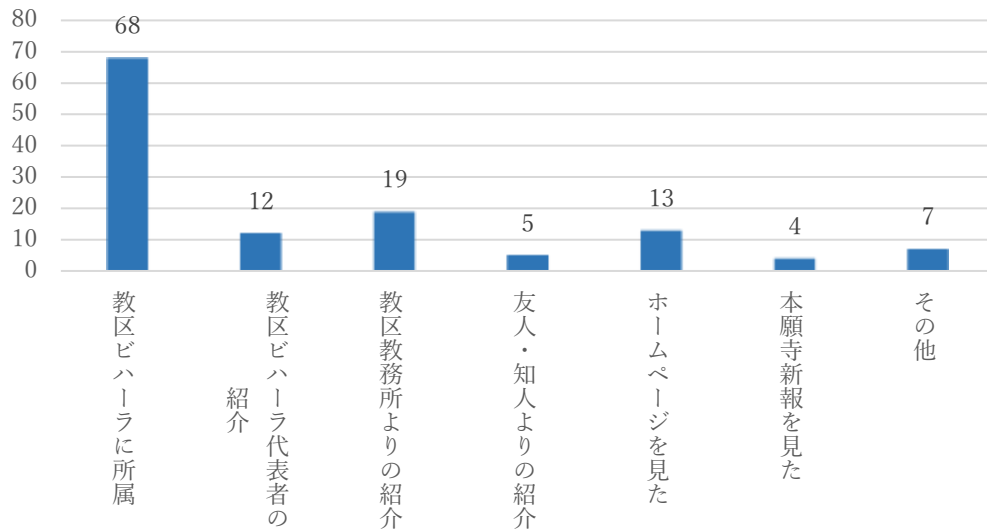
どちらで参加されましたか



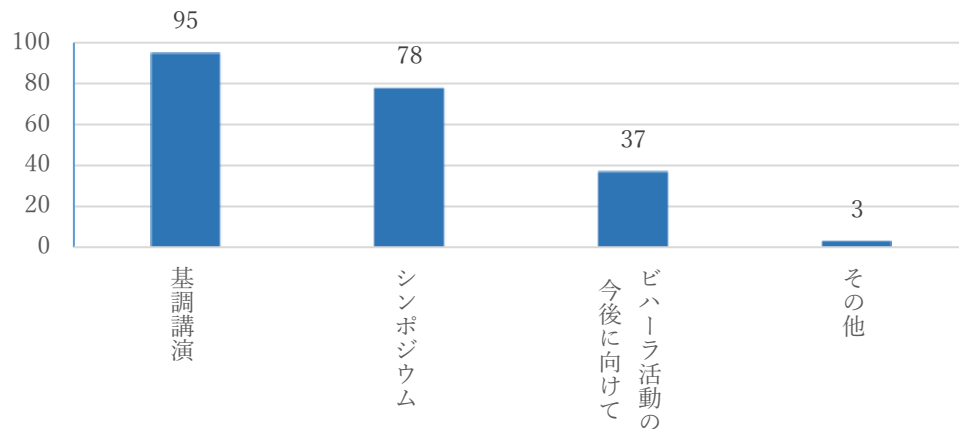
過去に参加されたことがありますか



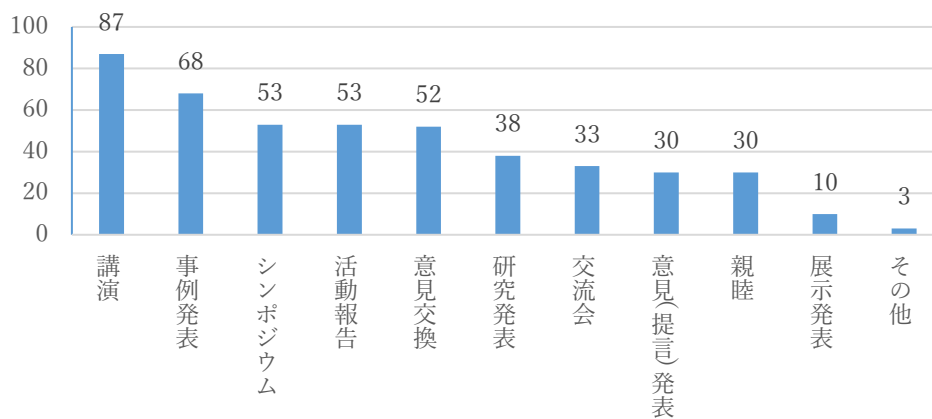
今回の全国集会をどのようにして知りましたか
(複数回答可)



どのプログラムに興味をもたれましたか
(複数回答可)



全国集会に望む内容はどれですか
(複数回答可)



今回はオンライン形式での全国集会でしたが、通常の集合型と比べてどうでしたか。率直な感想をお聞かせください

- ・臨場感はありませんでしたが自宅から、ゆっくりと聞かせていただきました。次回の全国集会やビハーラの研修会もこのようなオンラインでも参加できるようになると大変ありがたいと思っています。
- ・時間的問題で（往復や家事等）諦めることなく参加できたのが、とても良かったです。その一方で、直接会場で仲間に会える楽しみもあるので、その点では残念でしたが、同じくオンラインで参加した仲間とメール等で共有したいです。”
- ・通常の集会とは形式も内容も違いますので、一概に比較はできませんが、今回の新しい方法も、今後において検討していく価値のあるものだったと感じました。
- ・人との交流がないので実感がない。コロナ禍でやむを得ないが、せめて教区での集まりが必要と感じた
- ・YouTube ライブでの配信でチャットが使えないとなると一方的すぎる。参加者の意見を伝える場面が必要
- ・集合型の場合、移動の時間も含め拘束時間が長くなりますが、オンラインで自宅での受講は、気持ちの上でも気軽に参加でき、また集中してお話を聞くことが出来ました。集合型の場合のような、分科会などは難しいかと思いますが、このような形での開催は地方在住のものにとってとてもありがたい機会でした。ありがとうございました。
- ・周りの参加者の事を意識せず、気を使うこともなく集中できて良かったが質疑応答が出来ないのは残念でした。
- ・自宅で、ゆっくり聞くことが出来て良かったです。高齢化でオンラインが出来ない会員もおられたので近くの寺院でも、蜜を回避してオンラインで配信される事を望みます。
- ・今回はコロナウイルス感染の心配はもちろんのこと、時間的・金銭的にも優しいと思います。これからも集合型+オンラインのハイブリッドで続けてほしい
- ・講演などを聞くだけならオンライン形式でも十分。しかし、聞いたことを参加者同士が語り合う場所が必要と感じる。また、他の教区との情報交換、同じ教区内でも全国集会を通じて語り合うことがあると思われるので、その場所が必要と感じられる。
- ・気遣いのない自由な参加が気楽でしたが、やっぱり、オンラインは他の参加者との交流がなく残念。質問や意見交換の場がなく残念。呼吸や熱に触れ合うビハーラを早くとりもどしたいと願いました。
- ・トラブルなく視聴でき、感染が心配される中でも安心して参加できた。映像の切り替えもよく見え、臨場感も感じられた。それでも是非次回は集合型で参加したい。

参加しようと思われたきっかけをお聞かせください

- ・臨床宗教師の学びをしており、興味を持ったため。
- ・日頃のビハーラ活動に役立つ知識などを得たかったから
- ・中央仏教学院の通信講座を受講している傍ら、がん専門病院の事務職をしており、教区ビハーラからのご紹介で参加してみようと思いました。
- ・職場より紹介を受け、興味を持ったから
- ・自宅から参加できるから
- ・教区ビハーラ活動に参加させてもらっており、活動の参考にしたいと思いました。
- ・医療と福祉の業界でお仕事をさせていただいてきました。その中で少しでもかかわることができことはないかとも思っています。
- ・基調講演およびシンポジウムの内容に関心があったので
- ・以前から参加を希望していましたが、会社勤務がありできなかったのが、今回は休日のオンラインということで参加が可能になりました。
- ・ビハーラ活動の必要性を感じているため
- ・案内を見て、興味関心があった。今、聞きたい内容だった。
- ・コロナ禍で今後のビハーラ活動の方向性を見極めていく糸口を知りたくて。
- ・オンラインで、講演・シンポジウムを聴き、かつビハーラ活動を知れるから。

基調講演について感想をお聞かせください

- ・ものがたりは、お寺で、僧侶として、大切なことであり、特別なことではないと思いました。お参りに来られた方とも「しなやかな復活力」をもってお話させていただけるようになればいいなと思います。
- ・非常に難しい問題をととてもやさしく説明くださってありがとうございました。経験の編集作業によって「ない」を「ある」に変えていくのは頭では理解していても、心がついていけない。その過程を事例をたててお話くださいました。”
- ・悲しみの前に、無力感を感じることも多くありますが、語りを聞く、相手にインターしていく…ということがとても印象的でした。傾聴への意識が変わったように思います。
- ・日々の生活の上でのキーワードをたくさん教えていただいたような気がしました。みんな自分の人生のもの語りを紡いでる、ということを改めて考えさせていただき、先生の優しい語り口とともに、素敵な時間でした。”
- ・大変勉強させて頂きました。会話をもの語りとらえる発想を教えて頂いたように思います。
- ・大変興味深く聞かせて頂きました。ビハーラ活動のみならず人間同士の関係性の点からも考えさせられた。

- ・大変丁寧にわかりやすくナラティブ（もの語り）の持つ力とといいますか、それが生み出される場面や方法を教えていただき、興味深く伺いました。私自身も多くの方々にインタビューさせていただくことが多いですが、知らずに自分自身がお話を聞かせていただく人との間で行っていることが、やまだ先生のご説明で整理されたようにも思います。”
- ・大変感銘を受けました。とくに運送会社のものがたりに多くの示唆を頂きました。
- ・大変わかりやすく、もの語りの大切さを再発見しました。もう少し長くお話を聞きたかったです。
- ・相手のナラティブを聴くことはビハーラ活動にぴったりの方法であると感じた。
- ・僧侶としてということではなく、同じ人間として、寄り添い、生きていきたいという思いをあらためて感じました。
- ・正解を示さず、多様な喪失体験を尊重していて、そこが特に心に響いたし、信頼感の持てる講演でした。
- ・身近なことが語られ、特に、「もの語りの語り直し」、凄いい説得力のあるお話しでした。ありがたう(有難う)、おかげさま、しあわせ(仕合わせ)。普段よく耳にし、口にする言葉が深い意味を持っていることを、改めて考えてみました。まとめの1〜3、大きな学びでした。
- ・初めは、物語りたるものがビハーラとどう言う関係があるのか、ピンと来なかった。しかし、講演を通して人と人が語る事により物語りを紡いでいく事がどんなに重要なのかを知る事が出来た。
- ・初めて聞く学問分野ということもあったが、普段何気なく処理している問題も学問的に取り扱うとこんなに奥が深いのかと感銘を受けた。
- ・実際に活動をしていると、出会う方々は、喪失と向き合うときに語りがあり、語り直しがある。自分なりの受け止めというか。「共同生成」のお話、非常に納得できました。
- ・私達僧侶が知っているようで、見逃してしまっていることを自覚させていただきました。
- ・死後のことを絵で表現することが興味深かったです。
- ・今の状況の中。ものがたりをつくるプロデュースができる事は、元気が出ました。苦しみの中で傾聴は大切です。しかし自分が苦しくてつい話してしまいそうになる苦しみもありました。例えばと踏み出して一緒に刷り込んで紡ぐ物語にやってみたいと夢が書くことができました。多くの資料より導いていただきお礼申します。僧侶として私も生きていくことができそうです。立場を変えてものを見て、受け継ぐ物語ができるようにじっくりと進んでみます。何回も資料を読み返すことだと思います。今日の出会いに感謝いたします。
- ・以前から”ナラティブ”には大変興味をもっておりました。人はものがたりを紡いでいきいていると思います。今回、やまだようこ先生の体系的なお話を聞き、さらによく理解しました。
- ・やまだ先生のお話、非常に興味深く聴かせてもらった。自分の活動に活かそう。

- ・やまだようこ先生の講演は、非常にわかりやすく、たくさんの気付きがありました。ビハーラ活動に活かしていきたいと思います。
- ・やまだようこ先生のお話を初めて聞かせていただきました。失うことといきること、本当に大切な事です。こまやかに伺いました。物語りの多用性について考えさせられました。
- ・ものの語り〜物語になりえないような現実の中で、その「意味」を汲み取っていくことの大切さ。今後のキーワードです。
- ・ものの語りは共同生成という言葉はいいですね。傾聴のみではないのですね。
- ・ものの語りの角度から、自分のビハーラや真宗に対する考えを再度見つめ直すきっかけになりました。
- ・ものがたりを紡いでいくうちに　どんどん自分のものになっていくと　学びました　ありがたいは　本当に有難いことを　今この会に参加出来たことに感謝致します
- ・もう一度、じっくり聞かせて頂きたいような講演でした。特に、ものの語りの語り直し、という捉え方は、今後のビハーラ活動に有益な視点になりそうです。
- ・ビハーラ活動の基本とされる傾聴に関して、“ものの語り”についてお話しいただけた中で「何を傾聴していくのか」という点を深く考えることができた。
- ・ありがとうございました。ナラティブ、レジリエンス、沢山の事を教えて頂きました。「起こってしまった出来事は変えられないが、ものの語りは変えることが出来る」本当にそうだと思います。
- ・1人1人の人生には、いろんな終末を迎え、その人の人生の物語がある事を再確認出来ました
- ・「人生はものの語り」として、悲しみに寄り添う姿勢を教えて頂きました。悲しみのもと「喪失」は、死だけでなく日常誰にでも起こること。私は寄り添う前に寄り添われて人生という「ものの語り」を続けさせて頂いています。肉親や夫との死別の悲しみからあまり苦しまず抜け出されたことも寄り添いのおかげと、先生のお話を聞きながら思いました。ビハーラ活動というご縁で頂いた全て新しいかわり、お相手の思いも私の思いも大切に続けていこうと思います。ヒントをたくさん頂きました。
- ・「ものの語り」は今までの傾聴に加えすばらしい方向性と思います。
- ・「ものの語り」という言葉が初めてでしたので　少しとまどいましたが、もの語ることによって、相手の方の心を深くみつめ、自分の気付かなかった心にも気付けるという事に考えさせられました。その出来事を変えることはできないが、ものの語りは変えられるということをプラスに変えて生きる力にするお話しに感銘しました。
- ・昨年、母が往生の素懷を遂げ、日々、母のことを思い、今も支えられて生きています。母の思いと共に生きています。コロナ禍の社会状況の中、ものの語りを大切に、プラスに変えて生きる力が大きくなればと感じました。

シンポジウムについて感想をお聞かせください

- ・理論についての語り合いでなくて、普通の人として話されたことが多く、専門知識のない私にもわかりやすかったです。いつもはお話し合いに従っていくのが精一杯ですが、今日はその間に私の思いや行動を振り返ることができました。嬉しかったです。
- ・日ごろの法話に照らし合わせて考えることができた。概念的な話よりもたとえ話というお言葉はまさにお取次ぎにも大切なことであると感じた。
- ・多方面にわたり、経験された中からの語りは胸うちました。よく言われている事ですが、死んだら終りではないとの話し、未来について語りあう事の大切さを前向きにとらえられました。
- ・多角的な視点をいただき、とても意義深く聞かせていただいた
- ・先生方のお話に共感しながら聞くことができた。具体的にビハーラ活動で活かせる方法が話題としてでてきてよかった。
- ・色々な先生の話聞いて良かった。具体的な話で聴きやすかった
- ・実践を踏まえた対談でしたので、一人ひとりが実践する参考になったと思います。
- ・やまだ先生のご講演をどうビハーラに結び付けていけばいいのかと思いましたが、野村先生、丘山先生の解説で理解することができました。”
- ・やまだ先生のお話を更に深めて下さったのが良かった。特にナラティブプロジューサーとして「例えば～」と具体例をあげてもらうようにすると良い。とのご指摘は今後に生かしていこうと思った。また人に対する関心をもつと、その人をリスペクト出来るとのお話しも私もそうありたいと思った。”
- ・現在のコロナ禍の社会において、僧侶・寺族・門信徒が果たすことができる役割というものがあるように感じました。
- ・丘山先生のお話しに、深く共感しましたし、野村先生の現場でのお話し、理屈ではなく心で動いていらっしゃるように感じました。ありがたかったです。
- ・基本は大切ですが技術だけでなく、聞く人を選んで話されるはずですので、興味・関心を持ってお話させていただけるようになりたいです。求められた時に教義に基づいて話せる力は必要ですが、しなやかに相手を受け入れて聞くことも大切だと感じました。
- ・基調講演に加え、さらに多くの視点をいただき、有難かったです。
- ・基調講演で学んだ事を更に、パネリストの先生方が対話の中で掘り下げて下さり、1人の人間に取り、物語りを紡ぐか否かでその生きてきた人生が豊かなものになるかどうか大きく変わってくるのだと、学ばせて頂いた。
- ・やまだ先生の基調講演を基に、丘山先生、野村先生、伊東先生の視点があわさり、「ビハーラ」における「ものの語り」の重要性が語りなおされたように思いました。やまだ先生が説明してくださった、「ものの語りは共同作業によって「生成」される」という点を重視している視点が、丘山先生がもとより持たれていた「傾聴」という言葉のニュアンスに対する違和感と合わさって、ビハーラという活動の再定義にもつながるようなシンポジウムになったかと思います。あらためてビハーラの基本から学ばせていただこうと私も気を引き締めております。

- ・何人かの各教区の方からの意見があれば良かった。
- ・講演内容がより具体的にイメージできた。
- ・パネリストの方が、基調講演の内容を私たちの実践活動に落とし込んで下さりありがたかったです。(特に、丘山先生が「基調講演の内容をどう応用すればいいのか?」と、知っていたことをずばり聞いていただけたのでありがたかったです。)
- ・ナラティブプロデューサーを目指そうと思いました。
- ・ナラティブプロデューサーとしての、僧侶の役割が大切だということを教えていただいたこと。ストンと心に落ち、納得したひとことでした。人の人生の終焉に立ち会えるということは、何とありがたいことなのか…
- ・とくに丘山先生のお話に共感しました。話す人と聞く人がいてものがたりは成り立つこと。傾聴も知識や技術も大切だが、志やそのひとの貪欲な人への関心が重要!も納得しました。やまだ先生の「僧侶は語りの場づくりプロデューサー」は共感すること大です。
- ・どうしても真宗僧侶の立場と世の中の流れで見えてしまうが、ビハーラ活動がもっと人間関係で繋がる最前線と再確認させていただいた。
- ・それぞれの体験にもとづく「もの語り」のキャッチボールの中から、大切なことを学びました。
- ・それぞれの先生方のお話を興味深く聞かせていただきました。できれば、野村先生もリポートではなく、同じ場所だったらもっと盛り上がっていたのではないかと感じました。
- ・ご講演の内容をよりわかり易くお話し頂きました。1年お会いしてない方にお便りしようと思います
- ・カメラワークも軽快で出演者の表情も良く見えました。通常の対面よりも、没入感が増していたように思います。
- ・お話を聞きながら、認知症で施設にいる母のことを思い浮かべました。症状が進んで意思の疎通も出来なくなり悲しい思いをすることもありましたが、母には母の沢山のもの語りがあることを思いだしました。ありがとうございました。
- ・僧侶自身のご門徒様に育てられている、活動を思い上げることなく地道に継続していく、お通夜、ご葬儀、ご法事など、人生を共に物語って紡いでいく大切さなど、ビハーラ活動を行っておられる先生方の貴重なご意見を伺うことができ、有り難かったです。やまだようこ師の書籍など、読ませていただきたいと思います。
- ・ナラティブの力をどのようにヴィハーラ活動の中で生かしていくか、との丘山先生の問いにナラティブプロデュースの役割(ナラティブは聞き手と、話しての間に生成・蓄積されていくもの、人と人の交流・共振の結果生み出されてくるもの、そこに介在する聖なるもの←丘山先生流には仏力?仏願?人間流には人への関心?)をやまだ先生が語られていました(人それぞれにある物語に目を向けると、よく生き延びてきた認知症のおばあちゃん、と見ることができる力?)が、そこに大きなヒントがあると思いました。

ビハーラ活動の今後に向けてについて感想をお聞かせください

- ・木曾先生の提言で次に向かっている事を知り、心強く思う事です。ビハーラの種をまいていこうと思います。どう歩くか迷って悩んで、木曾先生を尋ね、踏み出したばかりの特別養護老人ホームの中止に、何が出来るかと思っていました。これからは苦悩している人に温かく寄り添っていこうと思わせて頂きました。
- ・微力ながら出来ることがあればやって行きたい。
- ・日常の中で、ビハーラの種を見つけるという言葉が心に残りました。ビハーラ活動にも今後関わっていきたいと思いました。
- ・地道に活動を続けていきたいと思います。
- ・大上段に構えるのではなく、身近なところで少しでもお役に立てればと思っています。
- ・他の教区や団体がどのような活動をしているのか聴きながら、私たちの活動を見直していきたい
- ・僧侶の先生方のようにプロデューサーにはなれませんが、一緒に語りを広げられる活動者になりたい。
- ・ビハーラ活動が中心となって、コロナ禍でたとえ感染症が減少していった後でも一層、老病死の問題にもっと深く関わっていける宗門に、方向性を見出してほしい。
- ・浄土真宗ビハーラの活動はご聴聞あつての寄り添いだと思います。全僧侶もしくは寺族がビハーラの研修を受けられ、ご門徒とともに歩むビハーラであってほしいと願っています。寺は葬儀、法事、月参りなど事あるごとにビハーラの間であり、御法話や寄り添いの機会と捉え、読経だけで終わらず、1分でも3分でも他力本願の真の自由さ、豊かさを伝えて、寄り添っていただきたいと思います。
- ・時代の要求にこたえる宗門となるための突破口として、ビハーラを実践し、日本仏教の衰退を転換する原動力となっていきたい。
- ・自分がその場にいる意味を考え、出来る事を考え、誰もが近くにいる事で安らぐ場所を提供していく
- ・私は私の大事にしているビハーラの生き方をこれからも続けたい。また、今後、教区ビハーラで、全国集会の振り返りや分かち合いをしたいと思う。
- ・施設訪問が制限されている昨今、第二期のテーマ「日常生活の中にある種を見いだす」ことを具体的に考えねばと思う。特に御門徒さんとの積極的な会話を心がけたいと思っている
- ・施設や病院での活動が制限されている今こそ、お寺の活用や僧侶の月参りでの活動を見直す良い機会だと思います。中陰や月参りでのご門徒とのもの語りを紡ぐ事をもっと大切にしていきたい。”
- ・今まで、病院や施設での活動や在宅、そして災害支援などについて様々に学ばせていただいたが、現在進行形のコロナ禍のような状況は想定出来ていなかった。今後、どのようなかはまだ分からないが、このような状況を考慮した研修プログラムも入れて欲しい。
- ・構えて活動するのではなく、常にビハーラ心を持っていれば、いつでもどこでも出来る事なのかなと思いました。

- ・個人でできることは限られているが、精いっぱい自分の役割を果たしていきたい
- ・現在、施設などには訪問出来ない状況で活動は停滞しています。日常生活の中にも多くの場面で必要な活動です、意識して継続したいと思います
- ・ビハーラ活動は医療と社会福祉と仏教のチームワークにより、人々の苦悩に向き合い、孤独の中に置き去りにしないように、最後までその人らしく精一杯いきぬけるように支援する活動です。そのビハーラ活動は、病院だけでなく寺院でおこなわれていたり、多様な社会実践活動ですので、それらすべてを認め合って、ビハーラ活動が身近に広がっていければと思います。
- ・ビハーラの種を育て、地道にできることを今、積極的に積み重ねていこうというメッセージに勇気を得ました。
- ・だれもが必要とされる活動について、もと多くの方々に一緒に活動できる様、知ってもらいたい。地道に長く続けなければとの思いを強くしました。親様の願いの中で強く生きていく
- ・コロナ禍で、施設訪問が全てできなくなり、又、地域の行事も、ほとんど中止の状況の中で、気持ちの中ではあせりがでてきました。終息するまでを小さい出会いの中でも、傾聴活動的にすごしたいと思います。
- ・コロナ禍で、教区の活動もオンラインで消化不良気味。今は、身近なところで、出来ることをさせていただきます。
- ・コロナで活動が制限されることも多いですが、コロナ禍の中だからこそ求められることがあるはずです。宗教者だからこそ語ってくださることに、言葉をはぐらかすことなく、向き合える力をつけたいと思います。
- ・テーマについてビハーラの実践が高齢者福祉、医療現場（終末）においてに特化していて、今までとても違和感を抱いていました。新たな提言は、お寺において、それぞれの地域においてビハーラ活動が今以上に実践されていくように思います。

その他、意見・感想・要望などございましたら、ご自由にお書きください

- ・ 例えコロナが収束してもオンラインを残し地元で参加できる可能性を消さないでほしい。
- ・ 多くの時間をオンラインで拝聴させて頂きお礼申します。とても有意義な時間でした。夢も頂けるとは思ってもいませんでした。いい時間ありがとうございました。皆様にお礼申し上げます。
- ・ 初めての参加でしたが、緩和ケアや終末期のケアを再度考える事が出来ました。
- ・ 医療、高齢福祉施設等に所属しておらず、ビハーラ活動を行っていない私にも、このような全国集会参加の機会を与えていただき感謝しております。ビハーラ活動をされている皆様、有り難うございます。オンラインで土、日に実施という機会が今後あれば、また、参加できるのではと思います。
- ・ コロナ禍の中、オンラインでのビハーラ活動全国集会に参加させて頂いてありがとうございました。活動は今、難しい状況ですが、終息するまでは近しい所での傾聴活動をしていきたいと思います。ありがとうございました。
- ・ 次回新型コロナの感染を乗り越えて、みんなにあえることを楽しみにしています。お疲れさまでした。
- ・ 今回は貴重な機会をありがとうございました。自宅で電話などに対応しながらで、抜けてしまった部分もありますが、このような形でも参加できたことをとてもありがたく思っております。オンラインでのこういった機会が増えていくととても嬉しく思います。
- ・ 今回はコロナの関係でリモートというはじめての形式での研修参加となりました。私のような地方に在住で子育て中の者にとっては、参加しやすく有難かったです。今後リモート形式での参加の形を残していただけたら幸いです。意見交換会もチャット形式などで参加してみたいと思います。
- ・ 今回のお話を自分に置き換えてどのように考え、どのようにビハーラ活動に生かしていくか、が大切だと改めて思いました。ありがとうございました。
- ・ 今までの集会では大勢の中でビハーラ活動の情報を頂いたり、仲間作りをしたり自分の活動の是非を確認したりで、雑然とした思いで帰りました。今日は、移動の面倒さ、人への気遣いなどがなく、集中して、お話を聴き、自分の活動と照らし合わせることができました。時には、何日かの集会で出た問題を集約して頂き、今回のような的を絞った話を聴き、自分の活動の確認・進め方を静かに考えさせてもらえる会もあってもよいなと思いました。

喪失の語り

— しなやかに生きる —

やまだようこ

京都大学名誉教授
立命館大学OIC総合研究機構上席研究員
ものがたり心理学研究所長

1

1 喪失を生きる

— 失うことと生きること

2 喪失から生成へ

— もの語りの語り直し

3 しなやかに生きる

— もの語りとレジリエンス

はじめに

2

私の喪失 経験を語る

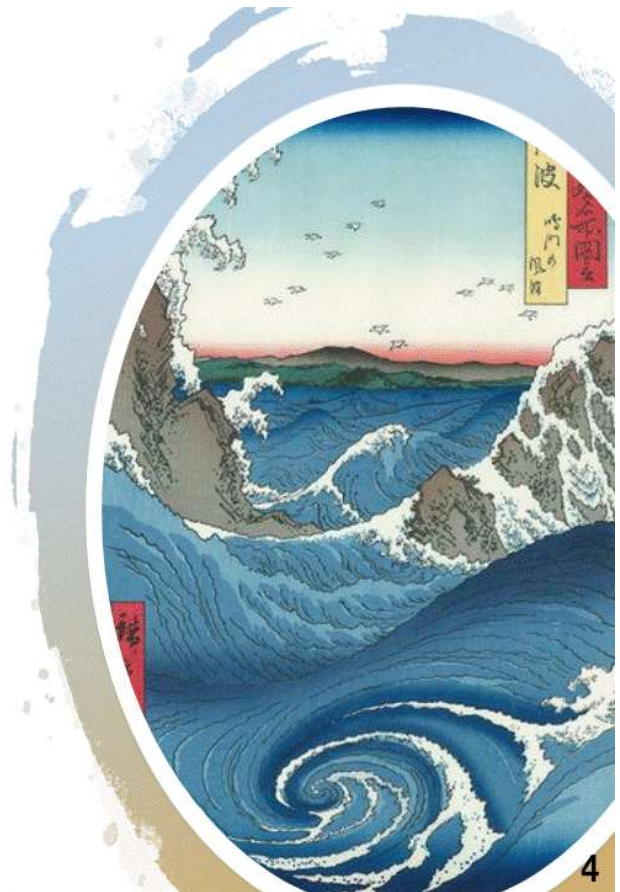
3

もの語り
(ナラティヴ) は
共同生成される

もの語りがもの語り
を生み出す

もの語りは

- 生きもの
- 生もの
- 生まれるもの



4

1 グリーフを生きる ー失うことと生きること

- ・「きみはまだ若いからこの現実世界で見喪って、それをいつまでも忘れることができず、その欠落の感情とともに生きているという、そういうものをなくしたことはないだろう？」
- ・まだ、きみにとって空の、百メートルほどの高みは、単なる空にすぎないだろう？・・・それとも、今までなにか大切なものをなくしたかね？」

（大江健三郎「空の怪物アグイー」）



5

- ・なあキズキ、お前は昔俺の一部を死者の世界にひきずりこんでいった。そして今、直子が俺の一部を死者の世界にひきずりこんでいった。ときどき俺は自分が博物館の管理人になったような気がするよ。誰一人訪れるものもないがらんとした博物館でね、俺は俺自身のためにそこの管理をしているんだ。

（村上春樹『ノルウェーの森』）



6

1 グリーフを生きる

ー失うことと生きること

- 関係性のなかでの死
- 「人はひとりで生まれてひとりで死んでいく」といわれる。⇒本当だろうか？
- 自分の生や死といえども自分のものではない。
- 人は、個人 (individual)ではなく、社会・文化・歴史的文脈 (コンテキスト context) のなかで生きている。
- 愛するものの死は、関係性が断たれること。

7

従来の死別と悲嘆や悲哀の考え方 (精神分析学が基になっている)

- 死別 (ビリーブメント bereavement)
- 悲嘆 (グリーフ grief)
- 悲哀 (モーニング mourning)
- フロイト 『悲哀とメランコリー』
- 喪の作業 モーニングワーク (mourning work)
- 死にとりつかれて悲嘆という強い負の感情 (リビドー) によって自我が抑圧されている状態から、死と対決し、自我を死から切り離し、心的外傷を回復する作業。

8

「回復」「克服」もの語り

- ボウルビィ 『愛着と喪失 (Attachment and Loss)』
(日本語訳では『母子関係の理論』)
- 愛着対象の喪失から回復するプロセスを3段階と考えた。
「失われた対象を取り戻したい欲求、否認」
「無秩序と絶望」「再編成」
- ⇒後の多くの研究者も追随。
- 死と直面し、死を受容し、死と対決すべきと考えられてきた。
「回復」「克服」もの語り。

9

「死者と共に生きる」もの語り

- 喪失からの回復や克服もの語りは、医療者などケアする側から語られてきた。
- 当事者のもの語りは、異なるのでは？
- フィンクベイナー 『子供を亡くしたあとで』
(朝日新聞社)
- 大学生の息子を駅でキスして見送った直後に、
貨物列車が突っ込んできて息子を亡くした。
- 「回復などというものが本当にあるのか？」
- 自分と同じように子供を亡くした親にインタビューした。

10

・「ん。せ。ま。い。え。な。い。消。の。て。は。と。っ。穴。こ。い。た。る。く。い。ま。ま。あ。埋。う。に。と。が。心。度。生。と。二。人。み。は。痛。れ。す。も。そ。で。て。」

- 死まののたん
が、い分たれたねの
心。自っされをな
す、まわら石み
は、でどし負け重し
ろのけてをつい悲
こもいっ架を重む
のたなな字石と沈
ぐしはく十重りに
すがじなに。し底
でじ感に心わっ奥
ん感な遠。るすの
死たん永ねえ。心
がえそがかいては
娘絶はか確もつれ
に、で何はとだそよ

もの語り (ナラティブ) とは？

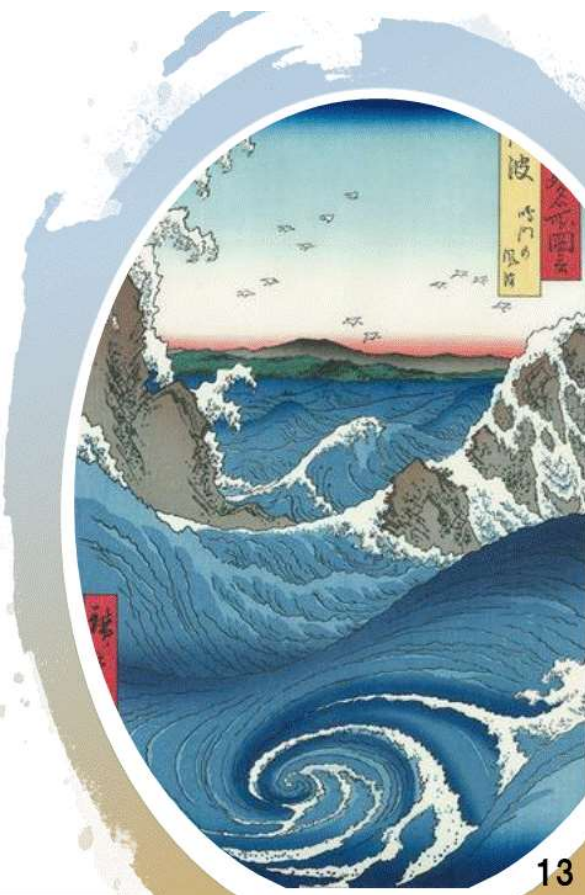
- ・「ナラティヴ (narrative)」とは、経験の編集作業。
- ・広義のことばによって経験を組織化し、意味づける行為 (Bruner)。2つ以上の出来事をむすぶ行為 (やまだ)。
- ・ナラティヴを「もの語り」と訳す。日本語の「物語」より広い意味。ストーリーと同義だが、語る行為も含む。
- ・日本語の「もの」は、(物、者、霊)を含む広い意味。「もののけ」「もののあわれ」など含蓄が深い。
- ・「もの語り」は、「当事者」の経験を重視する。正しい「もの語り」は、一つではない。「もの語り」は、立場や見方によって異なり、多様である。

59

ものの語り（ナラティブ） はひとつではない

・多様なものの語りがある

- ・ 支配的なものの語り（マター・ナラティブ）に対して、もうひとつのものの語り（オールタナティブ・ナラティブ）がある。
- ・ 立場によってものの語りは異なる
- ・ （医療者のものの語り－診断の語り vs 患者のものの語り－病いの語り）



13



糖尿病患者の ビジュアル・ナ ラティブ

- － 医療者から見た
ものの語り
- － 患者から見た
ものの語り

「糖尿病部屋の絵」
『糖尿病こころの絵
物語』

絵：増田さゆり
発売：時事通信社

14

2 喪失から生成へ もの語りの語り直し

ーセナの死とファンの人生
やまだようこ『喪失の語り』より

- ・事例1) 市田さんの語り
- ・セナは短い人生だったけど、普通の人よりも何倍も濃い人生を送ったんだ。
(死者の物語)
- ・私が死ねなかったのは、・・・まだ、私の人生をやり終えていないってことなんだ。私にもセナほどではないが、ささやかな使命があるかもしれない。だったら、私は運命に、それに従おうって。(私の物語)

15

2 喪失から生成へ もの語りの語り直し

- ・事例2) 式田さん
- ・セナはああいう死に方がセナらしい死に方だったかもしれない。セナが年老いて死ぬのも信じられないし、・・・ヒーロー性っていうのは、ああいう死に方じゃない？
(死者の物語)
- ・セナのような神さまのような人にも死は訪れるんだよね。だから私たちは命を大切にしなきゃいけない。(私の物語)

16

2 喪失から生成へ ものの語りの語り直し

- ・ 事例3) 三田さん
- ・ 世の中は良い人から先に死んでいくって、さっきも言いましたよね。(死者の物語)
- ・ 私にはまだ死ぬ資格はないと思っています。私は誰かに何もしてあげてないし、親に恩も返せていないし。(私の物語)
- ・ 死の資格をもらえたら、きっとセナのもとに行けるよ
うな気がする。

17

2 喪失から生成へ ものの語りの語り直し

- ・ 事例4) 四田さん
- ・ 「王者ゆえの孤独」みたいな・・・、セナは淋しかったのかな？セナは多くのファンに見送られたかったのかな？
引退して人知れず亡くなるのはイヤだって (死者の物語)
- ・ セナが80で引退したとして、日本の新聞にのると思う？
のらないよね。そう思うと、こうやって自分が見送れてよ
かった。 (私の物語)

18



2 喪失から生成へ —ものの語りの語り直し

- 1) 死者のもの語り×私のももの語り
「むすび」の生成機能
- 2) 仮定法化された現実の構成
もし・・・（かもしれない）、
だったら・・・
- 3) 時間軸の過去から未来への転換
- 4) イマジネーション（想像力）
非日常世界の役割
- 5) 文化×聖なる×私のももの語り
「死者が見守る」「死者と共に生きる」
「死者のおかげ」「受け継ぐ」

19

- 事例5) 市田さん
- セナが生きてるときはね、セナが、がんばってるから私もがんばろうと思ってたの。今は、セナが私のこと見守ってくれてるから、がんばろうと思える。
- 事例6) 武田さん
- 悲しいときに、「こんなことがあったんだよ、でもセナならもっと辛いことがあったね」と話しかける。

「死者が見
守る」もの
語り
「死者と共
に生きる」
もの語り

20

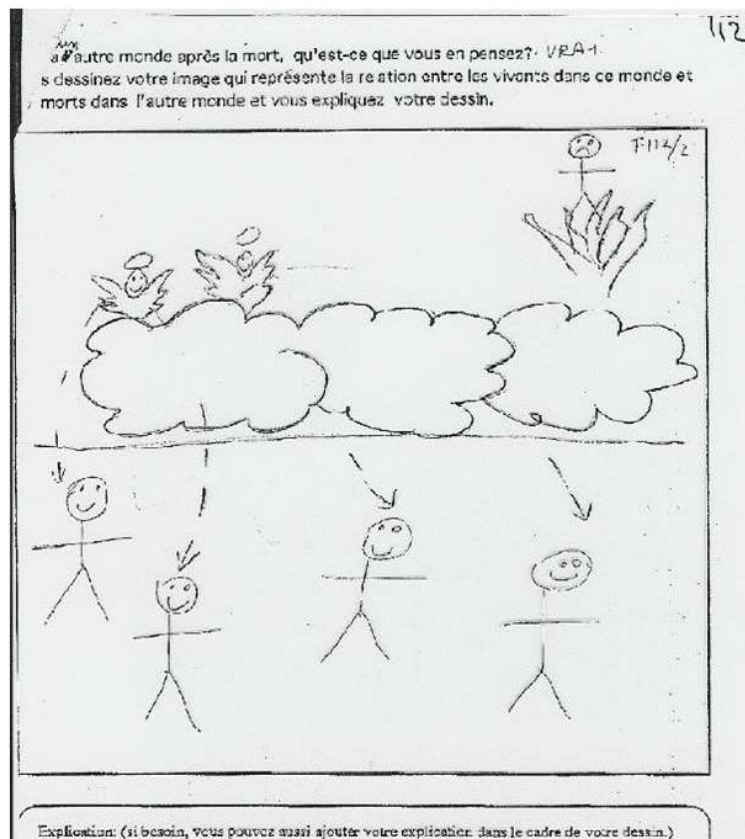


死者が見守る もの語り

日本の学生が描いた
ビジュアル・ナラティブ
「この世の人と
あの世の人の関係」

やまだようこ編
『この世とあの世の
イメージ』新曜社

21

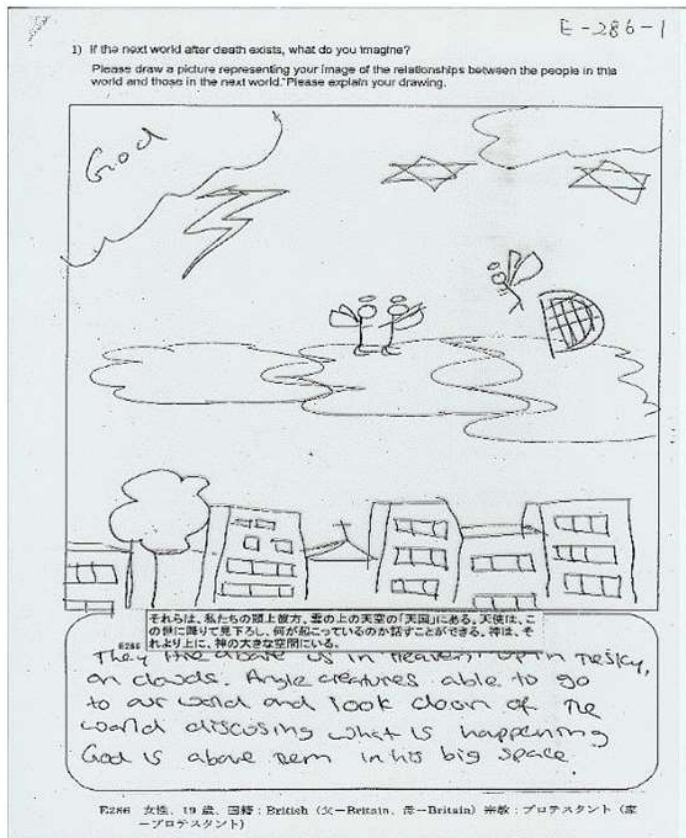


死者が見守る もの語り

フランスの学生が描いた
ビジュアル・ナラティブ
「この世の人と
あの世の人の関係」

やまだようこ編
『この世とあの世の
イメージ』新曜社

22



死者が見守る もの語り

イギリスの学生が描いた
ビジュアル・ナラティブ
「この世の人と
あの世の人の関係」

やまだようこ編
『この世とあの世の
イメージ』新曜社

23

「有り難い」 奇跡・救済 もの語り

「ありがとう」 おかげもの語り

- ・人間の力の限界を知る→
奇跡・救済・感謝・おかげ
- ・事例8) 市田さん。でも、
(セナに) 伝えたいこと
ばは、月並みだけど、感
謝のことばなんだよね。
本当にありがとう。
- ・事例9) 阪神大震災の友
人の死の語り。
- ・奇跡が起きてさ。70単
位とれたのよ。そんな
きは感謝すると思ったね。
信じられなかったね。お
お(亡くなった友人が)
助けてくれたと思って。

24



「奉仕」ものの語り

- 愛するものは、死んだのですから、
- たしかにそれは、死んだのですから、
- もはやどうにも、ならぬのですから、
- そのもののために、そのもののために、
- 奉仕の気持ちに、ならなけあならない。
- 奉仕の気持ちに、ならなけあならない。

（中原中也 『春日狂想』）

25



受け継ぐ ものの語り

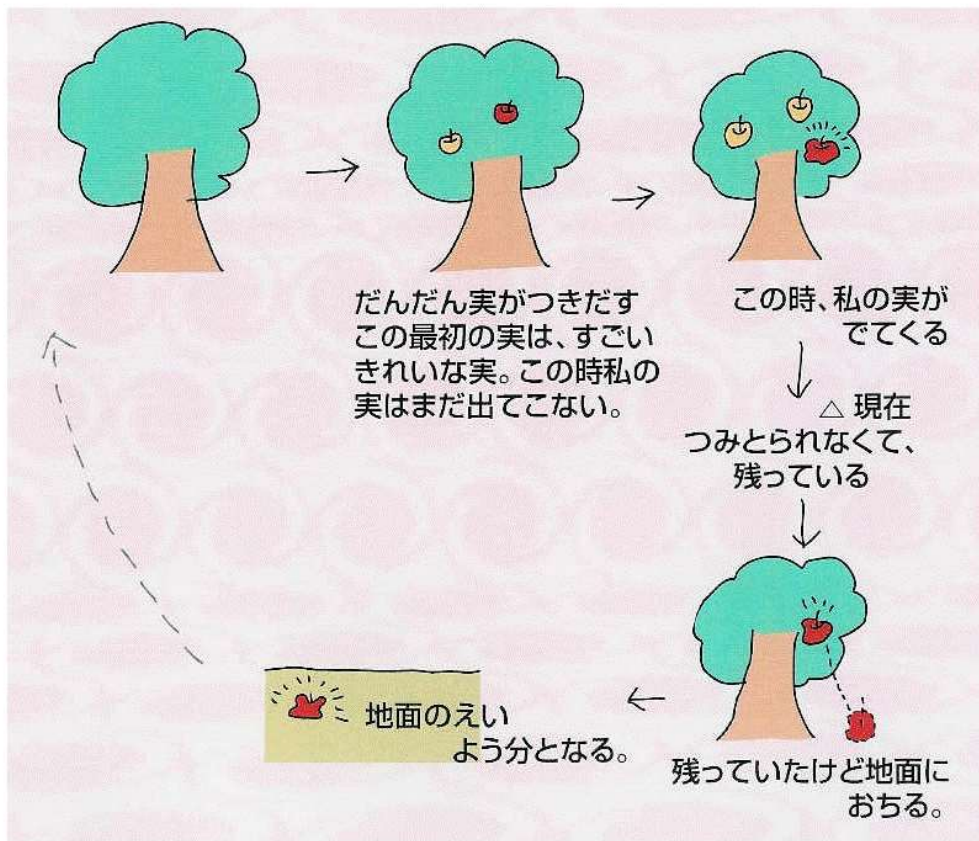
- 死者の何かを生者が受け継ぐ
（死者の贈り物をうけとる。死者の志を継ぐ）
- 世代間伝達のもの語り
（将来世代への贈り物）
- 生成継承性
（generativity）
- 世代（generation）
生成（generate）
- ケア（気づかうこと）

26

世代を越えて 受け継ぐ ものの語り 死から生へ

- ある人間の生涯を考えると、その誕生の時から始めるのではなく、そこよりはるか前までさかのぼり、また彼が死んだ日でしめくくるのでなしに、さらに先へ延ばす仕方で、見取り図を書くことは必要です。
- あるひとりの人間がこの世に生まれ出ること、単にかれひとりの生と死ということにとどまらないはず。かれがふくみこまれている人びとの輪の、大きな翳のなかに生まれてきて、そして死んだあともなんらかの、続いてゆくものがあるはずだからです。

(大江健三郎『M／Tと森のフシギの物語』)



3 しなやかな復活力 ーものの語りとレジリエンス



死亡事故を起こした運送会社。亡くなった方には子どもさんがいた。

「会社を大きくしよう」とがんばってきたけど・・・。「利益よりも、安全運転の運送会社にしよう！」ものの語りを変えた。

安全を祈ってトラックに子どもの絵を描いた。絵を媒介に注目され、会話がはずむ。仕事に誇りとよろこびが生まれた

運転手さんが変わった。
塗装屋さんが変わった。
協力者も増えた。
仕事も増えた。

29

3 負を転換する語りーレジリエンス（しなやかな復活力）

- ・人生において、取り返しがつかないマイナスの出来事（病気、事故、災害、失業、死、喪失など）は、多かれ少なかれ誰にも起こる。その出来事を変えることはできないが、ものの語りは変えられる。
- ・→不幸な経験をプラスに変えて生きる力にする。レジリエンス（回復力、復活力、弾力性、しなやかさ）
- ・私たちは、文化のなかに多様なものの語りの宝庫をもっている。適時、引き出しから出せる。
- ・→七転び八起き。艱難汝を玉にする。（ことわざ）
- ・→塞翁が馬(故事)。無用の用（荘子）
- ・→明けない夜はない。冬のあとに春が来る。（教訓）
- ・→上を向いて歩こう。あと一歩前に進もう。（歌）

30

流れ橋



- どんな水の圧力にも耐える頑丈な構造をつくるか、
 - 壊れても作り直せることを重視するか
 - レジリエンス（しなやかな復活力）。
- ⇒つくり直す、語り直す、変化プロセス重視

31

イギリスの新聞 THE INDEPENDENT ONSUNDAYの 一面記事



Don't give up, Japan!
Don't give up, Tohoku!

- 全てのお店は閉まっています、信号もありません。でもね、ちゃんとお互い助け合って順番を譲ってあげたりしています、だから変な事故とか争いがありません。みんなスゴイです！
 - 編集長のマリンさんはブログに興味を持ち、英訳させた。「私も共感しました。震災の悲惨さを伝えるのも大切だが、人々を勇気づけるメッセージの発信も新聞の役割では」。
- 2011.3.13

32

負を転換 する語り

「ない」 でも「あ る」構文

- 全てのお店は閉まっています、信号もありません。でもね、ちゃんとお互い助け合って順番を譲ってあげたりしています、だから変な事故とか争いがありません。みんなスゴイです！

(サンドウィッチマン
伊達さんのブログ)

- → 「ない」でも「ある」構文

33

仮定法を 幾重も 使った例

- 『喪失の語り』 無田さんの語り

- もう辛くて辛くてしょうがないから、セナのことは考えるのよそうと思って・・・毎日ボーとしてたら、ホントにボーとしてて事故やらかしたんだ。セナが死んでから2か月くらい後なんだけどさ、自動車でね。
- 本当なら、けっこう凄いケガしててもおかしくない状況だったんだ。そう思ったとき、私はすぐに「セナだ」と思ってさ、きっとセナが助けてくれたんだって。セナは遠くから私やファンの子たちを見守ってくれてるんだ、助けてくれてるんだと思ったの。

34



もの語りとしなやかな 復活力

自分で自分に繰り返し
かけている「ことば」
「もの語り」に気づく

自分を励ますもの語り

いとうひろし（作・絵）『だ
いじょうぶ だいじょうぶ』
講談社

35

負を転換する
もの語り

悪口言う人悪い
所持って行く

私の兄は両手足の指が1本
もない。私も1本しか指がな
い、障害者手帳1級と2級の
兄妹です。私たちが幼い頃は
障害者が外へ出るにも偏見が
あり、出会う子どもたちから
心ない言葉でからかわれた。
ある時、隣家のおばさんが
「悪口を言う人が、あなたの
悪い所をみな持っていくてく
れるのよ」とおっしゃった。

私たちは親の熱意と周囲の
善意で普通小学校に入った。
った。気味悪がられたのか、
いつかいいめはなくなった。
成人して、ジロジロ見る人
に友人が腹を立てると、私は
「美人だから見ているのよ」
と笑う。兄はパソコンで仕事
をし、大学非常勤講師。私は
「楽しい人だ」と周囲に言わ
れながら、福祉相談員として
忙しい日々を送っています。
人の痛みがわかるのはその
人の使命。今いじめられてい
るあなた、どうか誰かに話し
て下さい。一人ひとりはお

朝日新聞 2012.07.23

（声）悪口言う人、悪い所持っていく

36

ものの語りは多様である

喪失
(電球が切れた)



喪失を抱えて生きる複数の物語の生成



でも、私たちはまったく新しい照明システムを導入したんだ!

喪失や病いなど負の出来事が起こったとき、原因追求して解決する「因果関係」パラダイムをチェンジする。負の出来事は変えられなくても、それを抱えたまま「もの語り(システム)」全体を相対的に変える。

事例のように、切れた電球を元に戻せなくても、想像力で多様な照明システムを導入できればよい。「もし～なら」などの仮定法を効果的に使う方法を学ぶ。

(事例はTurnel & Essex, 2006をもとに試作)。

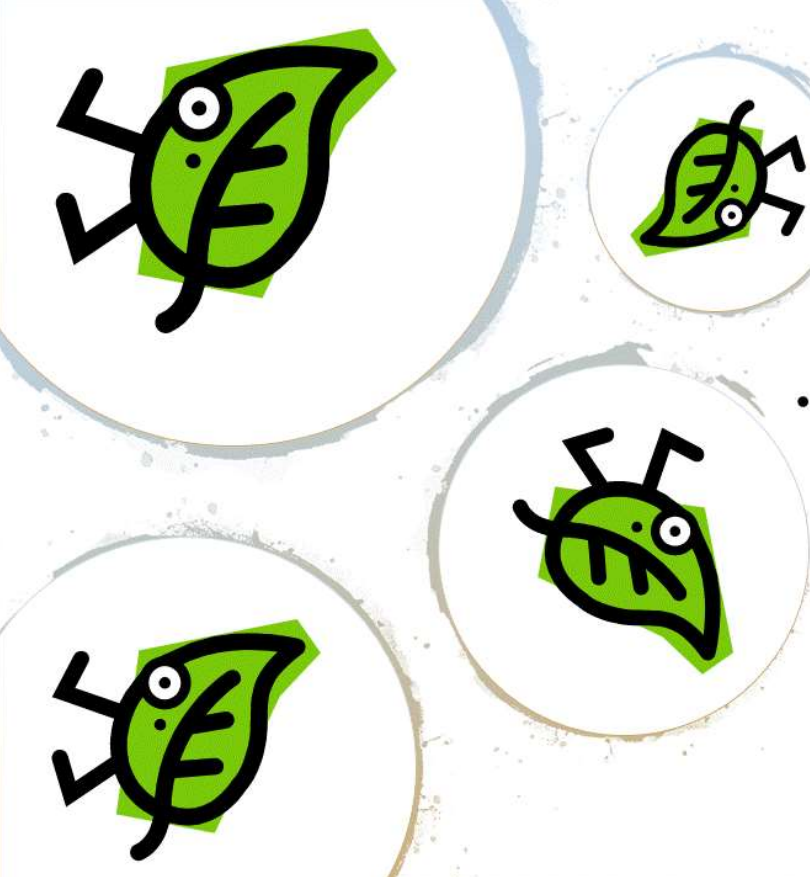
37



ものの語りの力 人生と未来を生成する

- 仮定法の役割「もし・・・なら」
- イメージの変換による新しい世界の生成
- 自己の体験世界や現前の世界を超えていく言語ゲーム、思考実験としてのナラティブ。

38

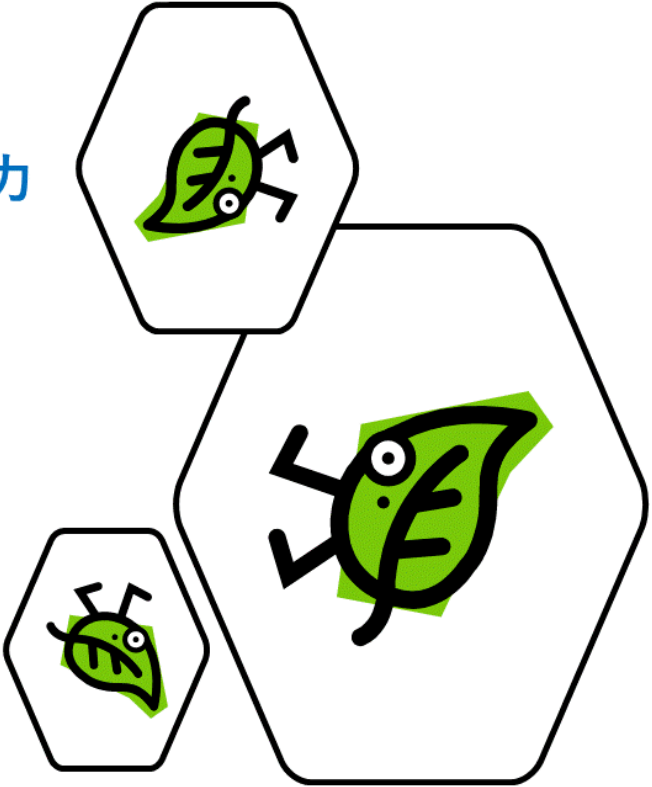


ものの語りの生成力

自己の限られた体験や現前の世界を超えていく言語ゲーム、思考実験

- ものの語りの実践は、われわれが自分にとって異質の世界に住みつくようになつて自分のための思考実験にある。
(リクール『時間と物語』)

39



ものの語りの生成力

イメージを変え、未来を変える力

- 人々は想像力とはイメージを形成する能力としている。ところが想像力とはむしろ知覚によって提供されたイメージを歪形する能力であり、それはわけでも基本イメージからわれわれを解放し、イメージを変える能力なのだ。

バシュラール『空と夢』

40



もの語りと レジリエンス (しなやかな 復活力)

奇跡の一本松
(2011年)

東日本大震災後
陸前高田市

41



参考書

- ・ やまだようこ 喪失の語り－生成のライフストーリー－ 新曜社
- ・ やまだようこ ナラティブ研究－語りの共同生成 新曜社
- ・ やまだようこ (編) この世とあの世のイメージ 新曜社
- ・ やまだようこ (編) 人生を物語る ミネルヴァ書房
- ・ やまだようこ (編) 質的心理学の方法－語りを聴く 新曜社
- ・ やまだようこ (編) 人生と病いの語り 東京大学出版会

- ・ やまだようこ HP 「もの語り心理学研究所」
- ・ <https://yoko-yamada.jimdosite.com/>

42

まとめ

1 「死」は克服しなくてもいい。「死者」とともに生きていく生き方もある。

2 もの語り（ナラティヴ）とは、経験の編集作業。もの語りに正解はなく、多様である。

3 文化のもの語りや、イマジネーションの力で、もの語りを語り直し、ものの見方を転換（ターン）してみよう。

ありがとうございました。



43

「第17回ビハーラ活動全国集会」 実行委員会名簿

No.	役 職	氏 名	備 考
1	委 員 長	竹 田 空 尊	所管総務・ビハーラ活動推進委員会 委員長
2	副委員長	那須野 淨 英	ビハーラ活動推進委員会 副委員長
3	副委員長	木 曾 隆	長岡西病院 ビハーラ僧
4	委 員	出 口 湛 龍	社会福祉法人本願寺龍谷会 理事長 一般財団法人本願寺ビハーラ医療福祉会 理事長
5	委 員	梨 本 興 正	第1連区ビハーラ代表（国府教区）
6	委 員	小 川 真理子	第2連区ビハーラ代表（岐阜教区）
7	委 員	西 郷 教 信	第3連区ビハーラ代表（滋賀教区）
8	委 員	木 村 善 友	第4連区ビハーラ代表（安芸教区）
9	委 員	深 谷 誠 了	第5連区ビハーラ代表（熊本教区）
10	委 員	内 本 隆 宏	ビハーラ本願寺施設長
11	委 員	野 村 康 治	本派高施協副会長 社会福祉法人至心会 理事長
12	委 員	成 田 智 信	(宗) 善了寺 通所介護事業所「還る家ともに」代表
13	委 員	鍋 島 直 樹	龍谷大学教授 龍谷大学大学院実践真宗学研究科長
14	委 員	吾 勝 常 行	龍谷大学教授
15	委 員	花 岡 尚 樹	あそかビハーラ病院院長補佐

※実行委員会はビハーラ活動推進委員会で構成されています。